

# 宗像地域における古墳時代首長の対外交渉と沖ノ島祭祀

重藤輝行

平成23年

「宗像・沖ノ島と関連遺産群」研究報告 抜刷

# 宗像地域における古墳時代首長の対外交渉と沖ノ島祭祀

重藤 輝行 佐賀大学文化教育学部講師

**要旨：**近年、津屋崎古墳群等の調査研究が進展し、宗像地域の首長墓の解明が進んでいる。また、集落遺跡の調査では朝鮮半島からの渡来人の動向を物語る資料が蓄積されている。両者の対比により、対外交渉を基礎とした宗像地域の首長層の台頭を描き出すことができる。沖ノ島は海上交通の要衝に位置しており、首長層の台頭と朝鮮半島との対外交渉を関連づけることにより、沖ノ島祭祀において宗像地域の首長層が果たした役割が議論できると考えられる。ただ、津屋崎古墳群の形成や渡来人を物語る資料の増加は古墳時代中期後半以降であり、古墳時代前期末における沖ノ島祭祀の本格化とは時期の隔たりがある。古墳時代前期末から中期前半において沖ノ島祭祀に関わった首長層とその時期の渡来人の動向を、弥生時代以降の広い視点で解明することが今後の大きな課題である。

**キーワード：**対外交渉、首長墓、津屋崎古墳群、馬韓系土器、渡来人

## 1. はじめに

福岡県宗像市沖ノ島祭祀遺跡は日本における祭祀遺跡の変遷の中で極めて重要な資料であり、古代における宗像大社とその祭神である宗像三女神の信仰の高まりから、国家的祭祀として位置づけられる。一方、沖ノ島は古墳時代において日本の社会形成に大きな影響を与えた朝鮮半島との交通の要衝にあり、祭祀遺物そのものはもちろん、遺跡の形成においても朝鮮半島諸国との関係を前提として理解すべきであろう。

沖ノ島では3次に及ぶ調査により各祭祀遺跡の時代、変遷が解明されている。この沖ノ島祭祀遺跡とそれを主導した古墳時代首長墓との対応については佐田茂氏の研究(佐田1991)や、首長墓の基礎的な資料調査に基づいた花田勝広氏、池ノ上宏氏の研究(花田1999、池ノ上・花田2000)により、宗像市東郷高塚古墳等の釣川流域の古墳群や玄界灘に面した津屋崎古墳群を焦点として、議論されている。また、近年では福津市・宗像市の教育委員会によって、各古墳の時期や規模等の内容解明が進んでいる。

一方、全羅北道竹幕洞遺跡の発掘調査によって、沖ノ島と対比できる祭祀遺物が明らかにされた。また、津屋崎古墳群周辺をはじめとする宗像地域の渡来系遺

物、渡来人との関わりを物語る資料も、集落遺跡の調査の進展に比例して増加している。

本稿では津屋崎古墳群等の調査及び研究の深化を考慮して宗像地域の首長墓の展開を整理し、北部九州におけるその位置づけを考えてみる。あわせて、北部九州の集落遺跡における朝鮮半島からの渡来的遺物の出土状況により渡来人の動向を考え、その中で宗像地域がどのような役割を果たしたかを検討する。これに基づいて、津屋崎古墳群をはじめとする首長墓の展開過程と対外交渉への関与を評価するとともに、沖ノ島祭祀と津屋崎古墳群の被葬者をはじめとする宗像地域の首長層との関係を論じてみたい。

なお、本稿においては沖ノ島祭祀や首長墓級の大型古墳の編年について言及するとともに、土器等についても言及することとなる。首長墓級の大型古墳については『前方後円墳集成』の10期区分(近藤編1992、以下、「前方後円墳編年」とする)を用いて、その時期を表現することにしたい。

集落遺跡等の検討では、土器編年を基準とする必要があるが、須恵器については大阪府陶邑の須恵器編年(田辺1981)、土師器は筆者の編年(重藤2009、重藤2010a、以下、「土師器編年」とする)を用いる。その関係を示したものが第1表である。

また、筆者は沖ノ島祭祀遺跡に関わった古代宗像の首長層の権力基盤は広く、旧宗像郡内、すなわち現在の宗像市、福津市に及ぶと考えている。これらの地域を一体として理解する視点が必要であろう。したがって、本稿では旧宗像郡を「宗像地域」として、論を進めることにしたい。

## 2 . 宗像地域における首長墓の展開

### (1) 宗像地域とその周辺の首長墓系列

宗像地域の古墳時代首長墓については、花田勝広氏、池ノ上宏氏らの詳細な研究がある。それらの研究を参考に、前方後円墳編年を基準として宗像地域における前方後円墳等の首長墓の展開をみておきたい<sup>1)</sup>。

福津市津屋崎地域の玄界灘に面する段丘上には、北から順に勝浦、新原奴山、生家・大石、須多田の4つの首長墓の系列が存在し、津屋崎古墳群とも称されている。ここでは、地理的分布から、13 - 16のグループに区分し、時間的な前後関係を加味して首長墓系列を捉えることにしたい(第1・2図 13 - 16)。

最も北に位置する勝浦の系列 13 は前方後円墳編年 7 - 8期の勝浦峯ノ畑古墳(津屋崎41号墳)(川述編1977)、勝浦井ノ浦古墳(津屋崎10号墳)(川述編1977)に始まる。勝浦井ノ浦古墳は前方部石室からTK208

型式 - TK23型式前後に相当する剣菱形杏葉、壺鐙等の馬具類及び挂甲等が出土することから8期でも古い頃に相当する。これに対して勝浦峯ノ畑古墳では後述するように木心鉄板張輪鐙、杓子形木心鉄板張壺鐙が出土し、勝浦井ノ浦古墳に先行する7期と考えられる。勝浦井ノ浦古墳の北方には群集墳、勝浦高原古墳群が展開し、群中には9 - 10期と想定される前方後円墳、勝浦高原11号墳(池ノ上編2002b)がある。ただ勝浦井ノ浦古墳と勝浦高原11号墳との間には時間的な隔りがあり、その間に横剝板鋌留短甲等の出土から8期頃に位置づけられる宗像市上野3号墳(近藤編1992)がおさまると想定しておきたい。装飾古墳の宗像市桜京古墳(白木編2007)、群集墳中の前方後円墳である牟田尻スライ古墳(近藤編2000)などは、勝浦高原11号墳に続く首長墓と思われる。なお、上高宮古墳は釣川西岸であるが、山を挟んで勝浦の系列に近い。20m余りの円墳と考えられているが、長方板革綴短甲1領などが出土し、4期に位置づけられ、勝浦峯ノ畑古墳と間隔が空いている(古墳の規模は花田1999による)。

新原奴山の系列 14 の前方後円墳には、新原奴山1号墳(川述編1977)、新原奴山22号墳、新原奴山24号墳、新原奴山12号墳、新原奴山30号墳(以上、橋口編1989)がある。新原奴山1号墳はTK208型式前後の須恵器が出土しており、7期に相当する。新原奴山22号墳は出土遺物は少ないが、隣接し、時間的に先行する21号墳から土師器編年V期の土器群が出土している。したがって、22号墳も8期以降に位置づけられる。新原奴山12・24・30号墳は発掘調査が実施されていないため正確な時期は不詳であるものの、12号墳は墳形から9 - 10期に比定できる。また、30号墳はTK43 - TK209型式の須恵器が表採され、天井の高い横穴式石室を主体部とすることが推測されるので10期に編年できよう。このほかに、新原奴山の前方後円墳群に隣接して、大型円墳の奴山正園古墳(奴山5号墳)(佐々木1978)がある。三角板革綴短甲片とIV期の土師器及び陶質土器の出土から6期に編年される。

新原奴山古墳群の南に位置する生家大塚古墳は、70mを超える大型前方後円墳であり、6世紀代の須恵器が出土している(池ノ上編2004)。新原奴山の系列と並行する時期に築造されたと考えておきたい。この他に、

第1表 本稿に関連する時期区分

西暦	時代区分	北部九州土師器編年 (池田編2009・2011)	陶色須恵器編年 (近藤1981)	【前方後円墳編年】 (近藤編1982)	沖ノ島 祭祀遺跡の 家連
300	古墳	西新式 (西新式1・2式)			
300	前期	土師器I期 (西新式1式)		1期	
		土師器II期 (西新式2式)		2期	
400	中期	土師器III期 (西新式3式)		3期	
		土師器IV期		4期	
		土師器V期	TK23 TK216 TK208	5期	沖ノ島 祭祀遺跡
		土師器VI期	TK25 TK47	6期	
500	後期	土師器VII期	WT10 TK30	7期	沖ノ島 祭祀遺跡
		土師器VIII期	WT85 TK40 TK209	8期	
600	古墳	土師器IX期	TK211	9期	沖ノ島 祭祀遺跡
700	古墳				沖ノ島 祭祀遺跡
800	平安				

須多田古墳群東方の山麓には大石岡ノ谷1号墳、同2号墳という2基の前方後円墳が所在する(池ノ上編2004)。須多田古墳群中の前方後円墳より小規模で、採集された須恵器から須多田の系列と平行して築造された9~10期の古墳と考えられている。花田氏(花田1999)の指摘するように、生家大塚古墳に続けて一系列15として理解することができよう。

須多田の系列16は大型円墳の須多田ニタ塚古墳、前方後円墳の須多田上ノ口古墳、須多田天降天神社古墳、須多田ミソ塚古墳、須多田下ノ口古墳以上、池ノ上他編1996a)の在自剣塚古墳(池ノ上編2004)からなる。須多田天降天神社古墳は表採された須恵器がMT15-TK10型式であり、須多田下ノ口古墳はMT85型式の須恵器を伴う。津屋崎の3つの首長墓系列の中で最大の規模を誇る在自剣塚古墳は埴輪を樹立せず、出土須恵器がTK43型式に相当することから、この系列中、最後の前方後円墳になる。

なお、三角板革綴短甲、陶質土器を出土することから5期に位置づけられる大型円墳、宮司井手ノ上古墳(橋口編1991)は、これらの系列からやや距離があり、継続的な首長墓の始まりとして位置づけることは躊躇される。また、宮地嶽古墳(池ノ上・花田2000)、手光波切不動古墳は、立地からこの須多田の系列に続く7世紀代の首長墓として位置づけられる。ただし、この時期には勝浦、新原奴山の系列では明確ではないので、9~10期の津屋崎古墳群に見られた複数の首長系列を統合するような存在とも言える。手光大人4号墳は全長43mの前方後円墳であり、複室横穴式石室を主体部とすることから10期と推測される(近藤編2000)。この時期、西郷川流域を基盤として出現した首長層で、須多田古墳群とは別系列として理解しておきたい。

宗像市に相当する釣川流域については調査が断片的であるが、花田勝広氏の研究(花田1999)や、宗像市教育委員会による徳重本村遺跡、田久瓜ヶ坂遺跡の報告書(岡1999、熊代編2002)により、首長墓系列が具体的に復元できるようになった。ここではこれらを参考に、釣川中流域南岸17、釣川上流域18、釣川中流域北岸19、釣川下流域東岸20に首長墓級の大型古墳のグループを分けて、検討を進めることにしたい。

釣川中流域南岸17では、古墳時代前期には全長64

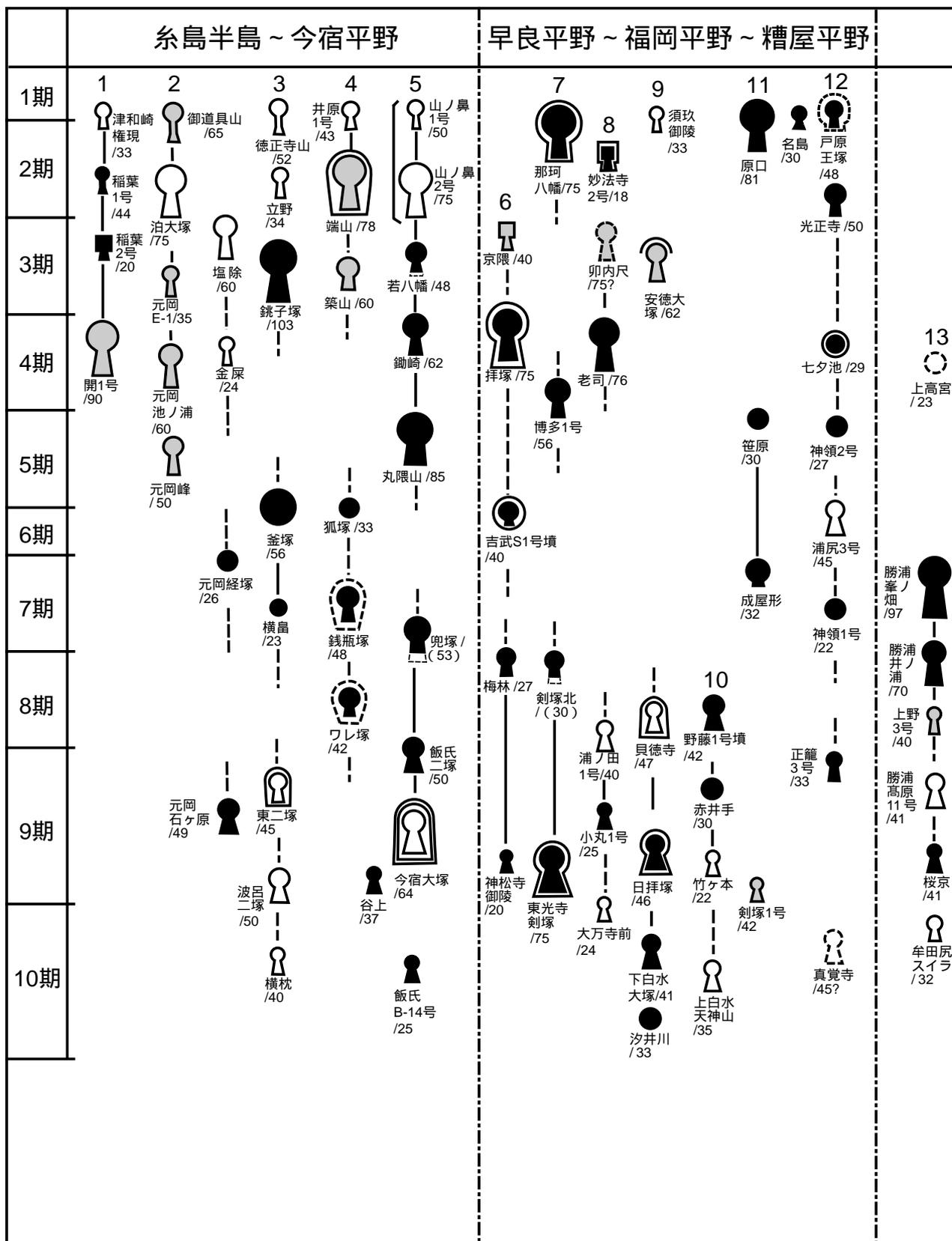


第1図 本稿に関連する宗像地域の大型古墳(黒丸)および古墳時代集落道跡等(白抜き丸)の分布

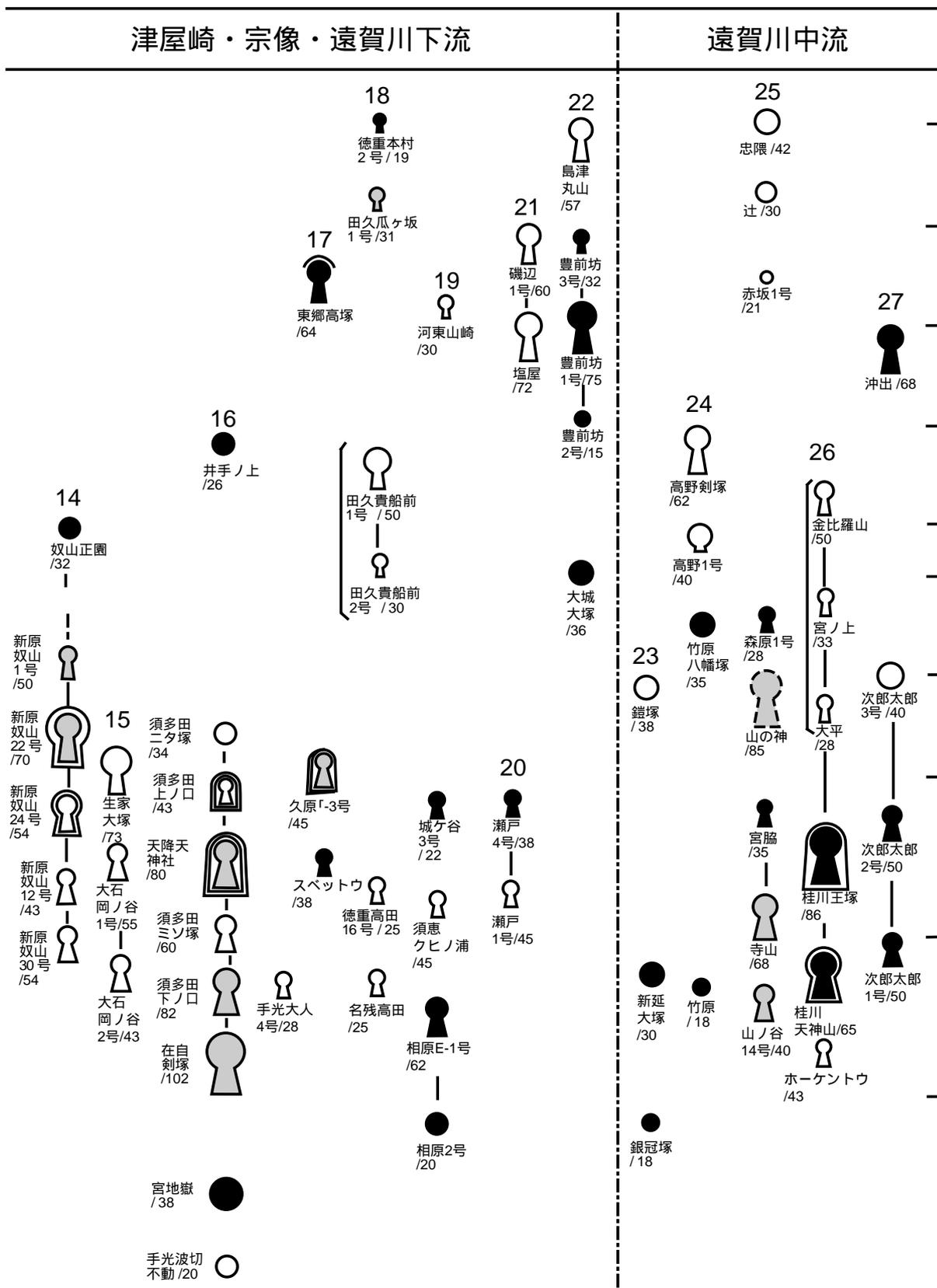
mの前方後円墳、東郷高塚古墳(原1989)が築造される。壺形埴輪、主体部の木棺粘土槨から3期と考えられる。中期の大型古墳は不明であるが、後期になると久原II-3号墳(清水編1988)、スベットウ古墳(波多野・春成1967)が築造される。

釣川上流域18では、徳重本村2号墳が最古である(熊代編2002)。全長17mと極めて小型で、木蓋土壇墓を主体部とする前方後円墳である。I期古段階の土師器を出土していることから、筑前地域でも最古級の前方後円墳として注目される。田久瓜ヶ坂1号墳(岡1999)は全長31mとやや小型の前方後円墳である。割竹形木棺2基と特異な土製円筒棺1基を主体部とし、2-3期に位置づけられる。田久貴船前1号墳、同2号墳は未調査のため時期は不確定であるが、墳形から古墳時代後期には降らず、前後関係を考えれば田久瓜ヶ坂1号墳に後続する3~5期の首長墓と考えられる(熊代編2002)。津屋崎古墳群や釣川中流域南岸の系列で当該期の明確な前方後円墳が確認されないため、その内容解明が期待される。9~10期には、この系列では徳重高田16号墳(近藤編1992)、名残高田古墳(近藤

③ . 宗像地域における古墳時代首長の対外交渉と沖ノ島祭祀



第2図 筑前北部地域の古墳時代首長墓系列（重藤1998、重藤2008を加筆・修正）



注) 内番号は第3・4図に対応、黒塗りは時期を限定できるもの、灰色は時期が前後する可能性のあるもの、白抜きは時期決定の根拠の弱いもの。“〔 ”は前後関係不詳の一群、“ ”は連続的な関係を示す。  
古墳名の後の数字は墳裾を基準とした全長ないし直径を示す。

編1992)という小型の前方後円墳が確認される。

釣川中流域南岸 19 では9 - 10期に、城ヶ谷3号(城ヶ谷古墳群調査団1974)、須恵クヒノ浦古墳(近藤編1992)、相原E - 1号墳(酒井1979)と3基の前方後円墳が相次いで築造される。特に相原E - 1号墳は全長60mを超える規模であり、9 - 10期においては須多田の前方後円墳に次ぐ規模を誇る。また、7世紀になると大型円墳の相原2号墳(酒井1979)が築造され、相原E - 1号墳に後続する首長墓と考えられる。この系列には、古墳時代前期にまで遡る可能性が指摘される河東山崎古墳(熊代編2002)も含めて考えられよう。

釣川河口部、下流域東岸の系列 20 には、全長38mの前方後円墳、宗像市田野瀬戸4号墳がある(岡・坂本編2007)。田野瀬戸4号墳は墓道出土の剣菱形杏葉の型式及び横穴式石室の形態から考えて、9期初頭に相当する。また、田野瀬戸4号墳に隣接して、前方後円墳、田野瀬戸1号墳がある。詳細は不明であるが、田野瀬戸4号墳と前後する時期のものと考えておきたい。

以上のように、宗像地域の首長墓級の大型古墳は、福津市沿岸域の津屋崎古墳群と、釣川流域の4つの首長墓系列に大きく分かれる。津屋崎古墳群では4 - 5期に上高宮古墳、宮司井手ノ上古墳があるが、本格的に前方後円墳の築造を始めるのは7期以降と考えられる。一方、釣川流域では、1 - 3期には徳重本村2号墳、田久瓜ヶ坂1号墳、東郷高塚古墳が築造され、田久貴船前1号墳、同2号墳は3 - 5期と想定される。津屋崎古墳群築造以前の首長墓は釣川流域に集中していると理解できよう。また、津屋崎古墳群の13、14の系列で本格的に首長墓の築造が始まる7 - 8期には、釣川流域では首長墓級の大型古墳が空白であることも注意される。

津屋崎古墳群では7 - 8期に勝浦の系列13で勝浦峯ノ畑古墳、勝浦井ノ浦古墳という70mを超える大型前方後円墳を築造する。しかし、後続する上野3号墳は全長40m程で、8期後半以降の津屋崎古墳群最大の古墳は新原奴山の系列14の新原奴山22号墳あるいは生家大塚古墳に移る。さらに、9期半ば以降は須多田の系列16でのみ須多田天降天神社古墳、須多田下ノ口古墳、在自剣塚古墳という80mを超える前方後円墳

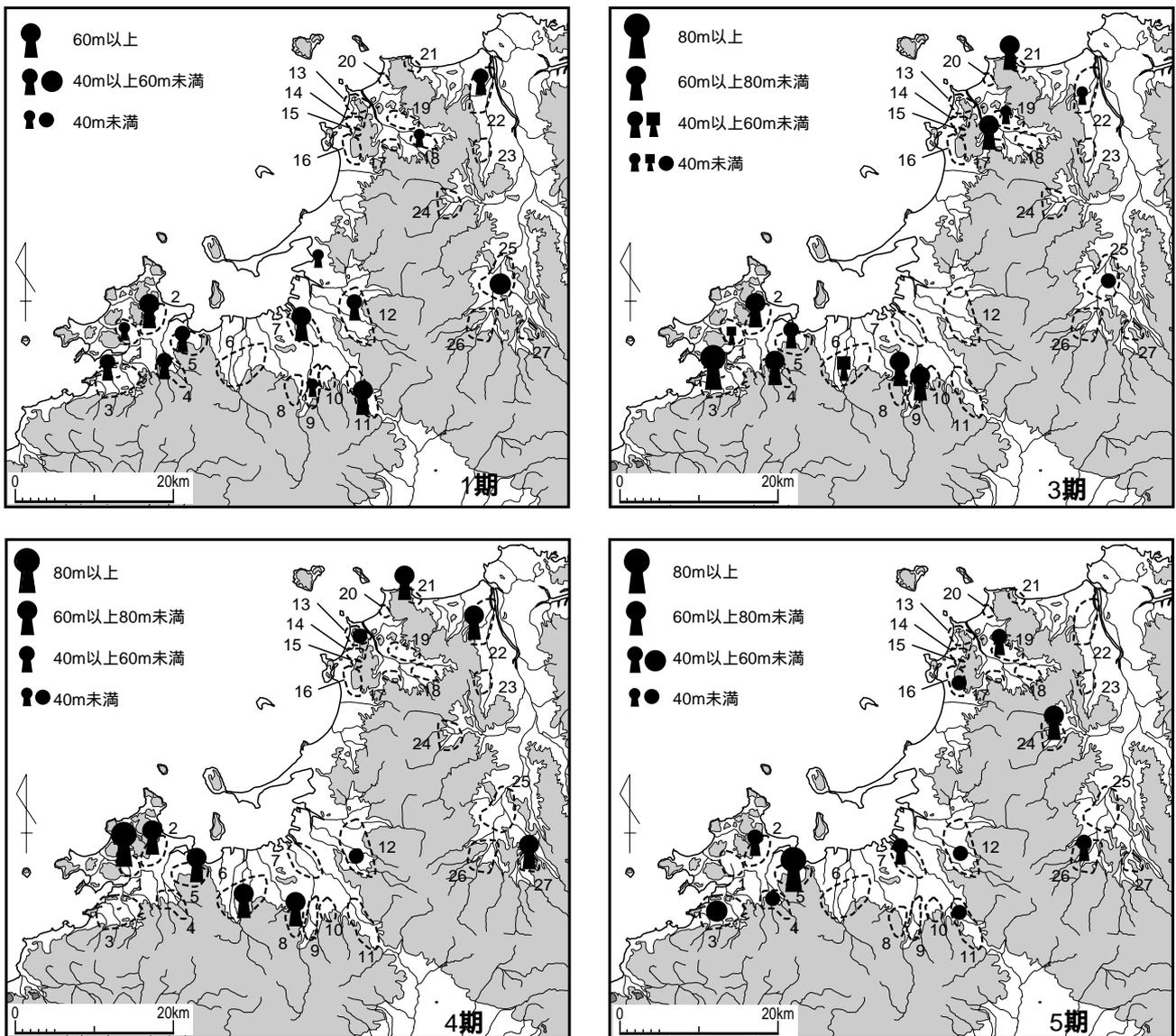
が築造されるようになる。7世紀になり、この系列で宮地獄古墳、手光波切不動古墳という胸形君徳善の墓の有力候補とされる大型円墳が築造されることとも合致していると評価できるだろう。

一方、9 - 10期には釣川流域の系列でも再び前方後円墳の築造が活発化する。その中には全長60mを超える前方後円墳、相原E - 1号墳もあるが、その他は全長50m以下であり、全長30m前後の小規模な前方後円墳も多い。花田勝広氏の指摘するように(花田1999)、津屋崎古墳群の中でも須多田の大型前方後円墳と、釣川流域の首長墓とでは大きな格差が存在する。津屋崎古墳群、釣川流域をあわせて宗像地域として捉えると、そこでは首長層内での複雑な階層性が9 - 10期に形成されたことが最大の特徴と言える。

## (2) 筑前北部における首長墓の展開からみた宗像地域

第2図には宗像地域以外にも、筑紫平野に含まれる筑前南部地域を除外した筑前北部地域の首長墓系列を示している。第3・4図は前方後円墳編年を基準に時期別に首長墓級の大型古墳の分布を示したものである。そこに1 - 27の番号で、各系列を構成する大型古墳の分布範囲を破線で示している。第3・4図によると、宗像地域も含めた筑前北部地域には今のところ27系列に首長墓級の大型古墳が区分され<sup>2)</sup>、宗像地域にはそのうちの8系列が集中していることになる。古墳時代を通じて見ると、糸島地域、福岡平野などにも首長墓級の大型古墳の系列が複数認められるが、宗像地域にはそれ以上の密集度で首長墓級の大型古墳の系列が分布することを第1に指摘できる。

ただ、宗像地域では前述したように1 - 5期の首長墓級の大型古墳は少なく、継続的な築造も現状では認め難い。この時期には第2・3図に示したように、糸島半島から今宿平野(1 - 5)において継続的に大型古墳が築造され、宗像地域とは対照をなす。糸島半島から今宿平野の地域では5期以前には全長80mを超える前方後円墳を、輪番的に系列を変えながら築造していくとも言える。しかし、6期以降になると、全長60mを超える前方後円墳は福岡市西区今宿大塚古墳のみである。この点でも宗像地域の大型古墳と対照的である。



第3図 1～5期の筑前北部の首長墓級大型古墳の分布

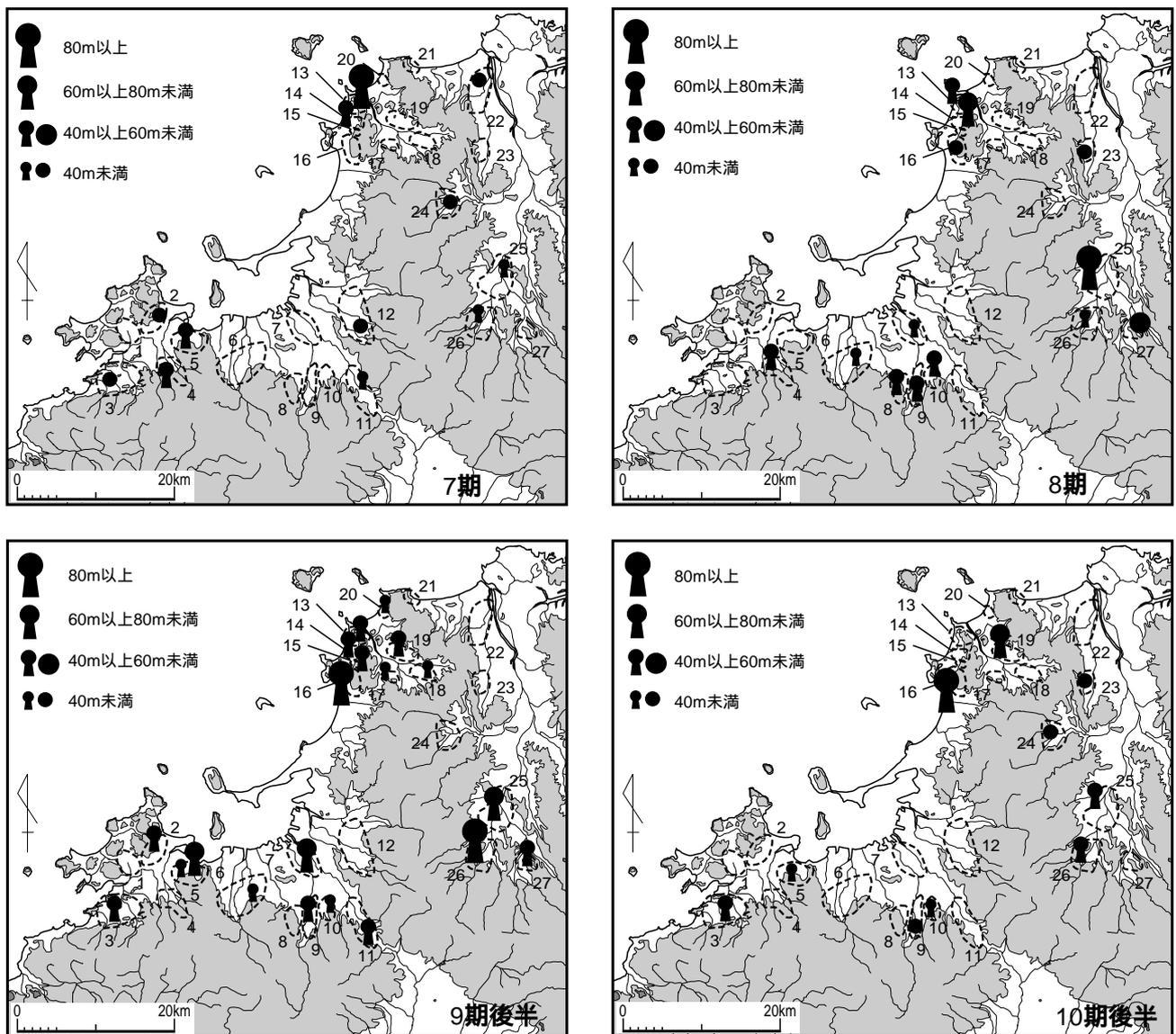
時期別に筑前北部地域の大型古墳の分布をみると、古墳時代初頭の1期には糸島半島東部 1 の御道具山古墳、福岡平野 7 の福岡市博多区那珂八幡古墳、御笠川上流 11 の筑紫野市原口古墳が古墳の規模において上位に位置する。宗像地域では徳重本村 2 号墳のみであり、古墳の規模でも大きな格差があると言えよう。

古墳時代前期後半の3期には長野川流域 3 に属する糸島市一貴山銚子塚古墳が筑前北部地域で最大規模を誇る。東郷高塚古墳はこの時期に相当するが、一貴山銚子塚古墳とは規模において大きな差がある。糸島半島から福岡平野では、福岡市西区塩除古墳 2、糸島市築山古墳 3、福岡市南区卯内尺古墳 8、那珂

川町安徳大塚古墳 9 と全長60m超の前方後円墳が集中している。

古墳時代中期初頭の4期には糸島半島西部 1 の糸島市開 1 号墳が全長90mを測り、筑前北部で最大規模と考えられる。また、糸島半島から福岡平野では福岡市西区元岡池ノ浦古墳 2、福岡市西区鋤崎古墳 5、福岡市早良区拝塚古墳 6、福岡市南区老司古墳 8 という全長60m以上の前方後円墳が多く分布する。宗像地域では当該期には上高宮古墳が想定されるのみで、福岡平野以西とは対照的である。ただし、遠賀川流域では下流の 21、22 で岡垣町塩屋古墳、遠賀町豊前坊古墳、中流の 27 で沖出古墳という全長60m以上の

③ . 宗像地域における古墳時代首長の対外交渉と沖ノ島祭祀



第4図 7～10期の筑前地域の首長墓級大型古墳の分布

前方後円墳が相次いで築造されることが注意される。

筑前北部地域全体で古墳時代中期前半、5期に属する確実な大型古墳は少ないが、今宿平野 5 の全長85m程に復元される福岡市西区丸隈山古墳が最大規模である。遠賀川流域では若宮町高野剣塚古墳 26 がこの時期前後と推測され、全長60mを超えている。一方、宗像地域では宮司井手ノ上古墳と、この時期前後に推定される田久貴船前1号墳を挙げうるのみであり、規模の面では丸隈山古墳に及ばない。以上のように、5期以前は各時期を通じて、糸島半島から福岡平野で筑前北部最大規模の前方後円墳が築造されていると言える。

これに対して古墳時代中期後半、7期には全長100m近い勝浦峯ノ畑古墳が筑前北部で最大の古墳である。5期以前に全長60mを超える大型前方後円墳を活発に築造した福岡平野以西の地域(1 - 12)では全長60m弱と考えられる福岡市西区兜塚古墳が最大であり、勝浦峯ノ畑古墳との格差が指摘できる。

古墳時代中期末、8期には墳丘が消滅して詳細な規模が不明ながらも全長85m前後と推測される遠賀川中流域 25 の飯塚市山ノ神古墳が筑前北部地域最大の古墳として想定される。ただ、津屋崎古墳群でも勝浦井ノ浦古墳、新原奴山22号墳という全長70mを超える前方後円墳を築造しており、勝浦峯ノ畑古墳以来の流れ

として理解できる。これらに対して、福岡平野以西の地域では全長50m以下の前方後円墳の築造にとどまっている。

古墳時代後期前半に相当する9期後半には再び、全長60mを超える前方後円墳が筑前北部の各地域で築造されるようになる。今宿平野 5 の福岡市西区今宿大塚古墳、福岡平野 7 の福岡市博多区東光寺剣塚古墳、遠賀川中流域 26 の桂川町王塚古墳、そして津屋崎古墳群中の須多田天降天神社古墳である。このうち最大規模のものは全長86m程に復元される王塚古墳であるが、天降天神社古墳も全長80m程でありこれに次ぐ。また、天降天神社古墳の築造前後、津屋崎古墳群では生家大塚古墳、須多田下ノ口古墳等の全長80m前後の前方後円墳を相次いで築造している。これに対して今宿大塚古墳、東光寺剣塚古墳に前後する首長墓は規模が小さく、1代限りの築造とも言える。王塚古墳に次ぐ首長墓と想定される桂川天神山古墳は全長65mと同時期の筑前北部地域全体の中では注目される規模であるが、それでも王塚古墳からの規模の縮小は否めない。

6世紀末に近い10期後半は前方後円墳の築造終焉期に相当し、大型古墳の築造自体が少ない。その中で全長100mを超える在自剣塚古墳は筑前北部最大であり、同時期の北部九州の前方後円墳の中でも、全長103mの久留米市田主丸大塚古墳に匹敵する規模である。

以上のように、7期以降になると津屋崎古墳群及び遠賀川中流域で各時期の筑前北部最大の古墳が築造されたことが確認できる。5期以前には糸島半島から福岡平野で筑前北部最大の古墳が築造され、60mを超える前方後円墳が集中していた状況とは大きな変化が生じている。とりわけ、津屋崎古墳群は80m前後の筑前北部地域では最大級の古墳を代々、築造したことに特徴がある。このような津屋崎古墳群における大型古墳の築造動向は沖ノ島祭祀の盛行と合致しており、沖ノ島祭祀を主導するとともに、それを通じて畿内及び朝鮮半島との関係を結ぶことで権威を高めた首長層の姿を想像することができる。

ただ、古墳時代中期前半以前の宗像地域では大型古墳の活発な築造が認められなかった。これに対して、沖ノ島における祭祀は前期末、すなわち3期にはすでに本格化している。その主体としては3期の宗像市東

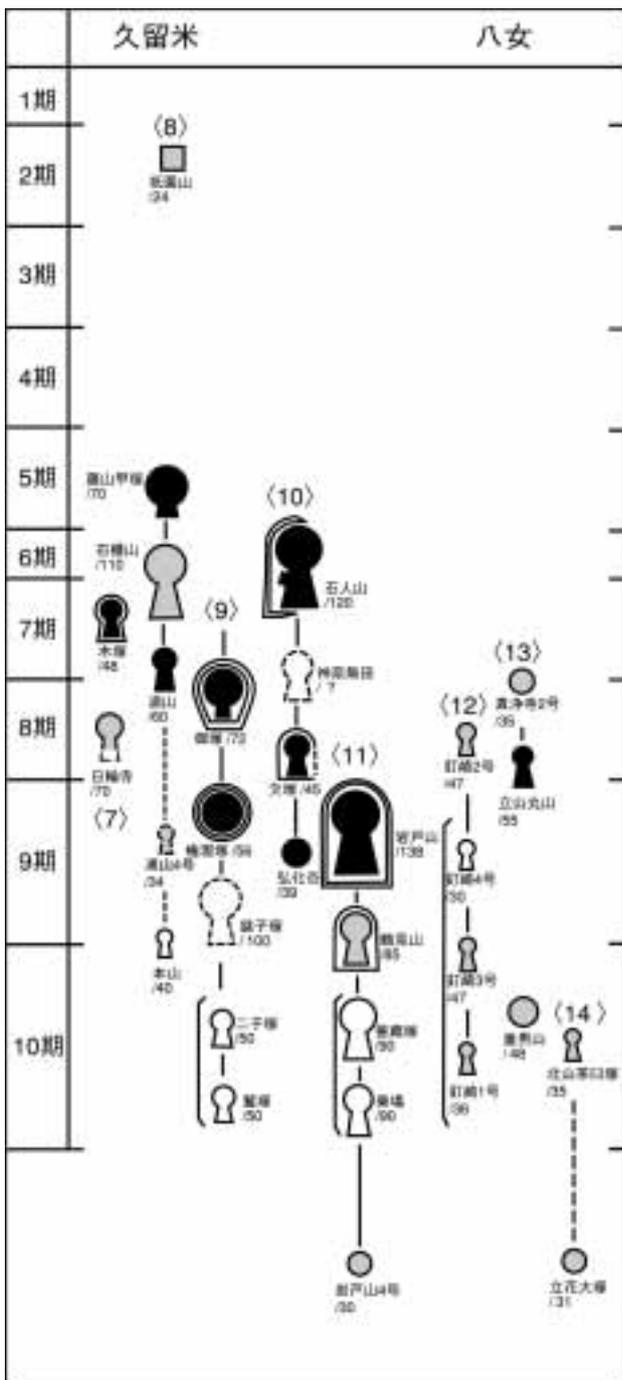
郷高塚古墳の存在が第一に注意される。その一方、遠賀郡岡垣町域の北の玄界灘に面した段丘上 21 には磯辺1号墳、塩屋古墳という全長60mを超える大型の前方後円墳が3 - 4期に築造される。また、遠賀川河口からやや内陸の西岸側、遠賀郡遠賀町地域 22 には1 - 4期の島津丸山古墳、豊前坊1号墳、豊前坊2号墳という3基の前方後円墳がある。このうち島津丸山古墳は未調査であるが、墳形から考えて筑前地域でも最古級の前方後円墳のひとつであり、1 - 2期に相当しよう。また、豊前坊1号墳は東郷高塚古墳からやや下る時期の壺形埴輪が出土し、3 - 4期に位置づけられる。これらの地域では津屋崎古墳群での大型古墳の築造が活発化する7期以降には大型古墳の築造が認められず、地域を越えた関連性、継続性さえ想定される。東郷高塚古墳、田久貴船前1・2号墳とともに、遠賀川下流域の大型古墳と沖ノ島祭祀との関連の有無が今後の大きな検討課題となろう。

一方、筑前地域全体をみても、津屋崎古墳群は非常に狭い範囲に密集し、複数の系列で大型古墳を築造したことが特徴であった。津屋崎古墳群に葬られた首長層の生産基盤を考えると、古墳群周辺地域では十分ではなく、広く考える必要がある。これに関しては7期以降の遠賀川河口から岡垣町域の系列での大型古墳の築造の中断、7 - 8期における釣川流域での大型古墳の空白が注意される。また、津屋崎古墳群と糟屋平野の間の地域では、古墳時代の各時期を通じて大型古墳の継続的築造が認められない。津屋崎古墳群の首長層、ひいては宗像君の生産基盤を考える場合には首長墓系列の変動に加えて、釣川流域はもちろん、遠賀川河口から糟屋郡北部地域までの広い範囲を対象とする必要があると考えている。

### (3) 八女古墳群と宗像地域の首長墓系列の対比

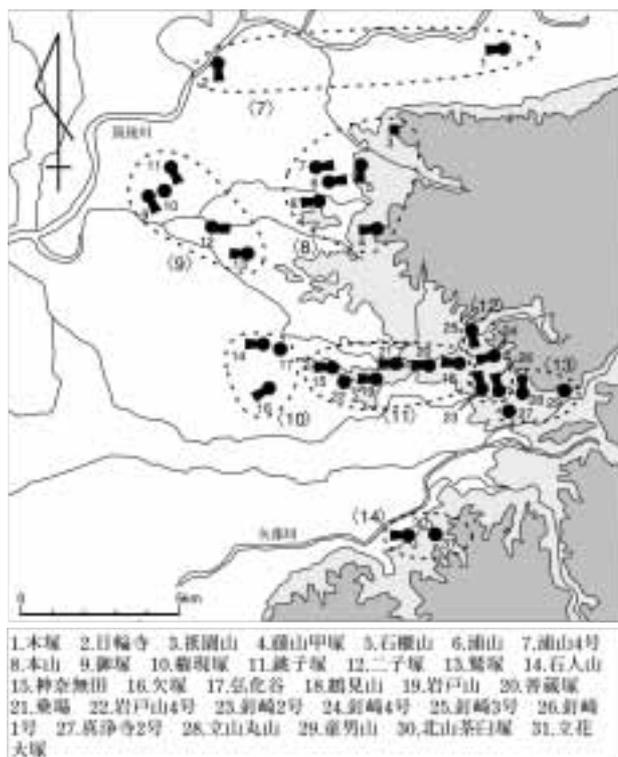
先述のように、9 - 10期の宗像地域では須多田古墳群で80m前後の大型前方後円墳を代々、築造し、他の系列でも中小型の前方後円墳等の首長墓を活発に築造している。このような状況は筑前北部全体を見渡しても際立つ存在である。これと比較できる首長墓の築造動向を示す例として、北部九州地域では筑紫君の奥津城とされる福岡県八女古墳群(第5・6図 10 - 13)

③ . 宗像地域における古墳時代首長の対外交渉と沖ノ島祭祀



第5図 久留米～八女地域の首長墓系列  
(重藤2010cを改変)

注) 内番号は第6図に対応、黒塗りは時期を限定できるもの、灰色は時期が前後する可能性のあるもの、白抜きは時期決定の根拠の弱いもの。“〔 ”は前後関係不詳の一群、“ ”は連続的な関係を示す。  
古墳名の後の数字は墳裾を基準とした全長ないし直径を示す。



第6図 久留米～八女地域の首長級大型古墳の分布  
(重藤2010cから転載)

があげられる<sup>3)</sup>。

八女地域では矢部川右岸の丘陵上に多数の前方後円墳、大型の円墳が分布する。それらを代表する存在が、八女郡広川町石人山古墳と八女市岩戸山古墳である。石人山古墳は表採された須恵器が池の上Ⅲ式(橋口1983)にほぼ相当し、6 - 7期に位置づけられる。岩戸山古墳は墳丘規模、石製表飾類の樹立状況から、筑紫君磐井の墓と考えることが通説となっている(森1956)。なお、第5図では、岩戸山古墳の規模が大きく、後続する古墳との間隔が小さいために、その位置が9期初にまでかかっているが、筑紫君磐井の墓として問題はなく、時期は9期中頃である。

八女古墳群を代表するこれら2基の大型古墳の間には、若干の時間差があり、その間を埋める存在として、石人山古墳に隣接し、破壊により消滅した前方後円墳、広川町神奈無田古墳を想定する説がある(佐田1981他)。ただ、石人山古墳を中心とする丘陵西部10には神奈無田古墳の他に、TK23 - TK47型式の須恵器を出土し、8期に編年できる筑後市欠塚古墳、9期に位置づけられ、大型円墳で彩色した装飾壁画をもつ横穴式石室の広川町弘化谷古墳もあり、これらをあわせて1つの首

長墓系列として理解する方が良いと思われる。そこで、丘陵西部の系列を岩戸山古墳をはじめとする丘陵中央部 11、丘陵東部 12・13 の首長墓群とは区別して考えておきたい。

八女古墳群の明確な形成は6期の石人山古墳以降と考えられ、それ以前の首長墓が問題となってきた。筑紫君の本貫を筑紫野市周辺に想定し、小郡市域あるいは筑紫野市域からの首長墓の墓域の移動を考える説もある。筆者はそこまでの広域の墓域の移動は想定していない。津屋崎古墳群の大型前方後円墳では勝浦峯ノ畑古墳が最古であり、それに先行する古墳としては上高宮古墳、宮司井手ノ上古墳、奴山正園古墳という直径20m余りの円墳であった。八女丘陵周辺、矢部川流域でも、直径20m前後の円墳等を再検討し、石人山古墳に先行する1 - 5期の首長墓の存在を明確にする必要性を感じている。

岩戸山古墳のような巨大な前方後円墳、あるいは筑紫君磐井という地方豪族が出現した背景として、小田富士雄氏(小田1970)は、婚姻や統属などの手続きによって筑紫君が北部九州の首長層の上に君臨する地位を獲得し、九州におけるデスポットの政権を確立しようとしたためと述べている。吉田晶氏(吉田1975)は考古学的事象も考慮し、吉備や毛野と同様に、筑・豊・火の首長層の間で筑紫君一族を中心とした首長連合が形成され、磐井はその首長連合の最高首長であったと想定している。柳沢一男氏(柳沢1987、柳沢1991)、蒲原宏行氏(蒲原1995)は石製表飾、阿蘇溶結凝灰岩製の舟形石棺、横口式冢形石棺の動向から、首長連合を構成した範囲として有明海沿岸地域を想定している。

宗像地域の古墳では、八女古墳群や有明海沿岸地域における石製表飾、石棺のような首長間のつながりを象徴する考古資料はないものの、9期以降の大型古墳間の階層性から、首長層の複雑な関係性が想定された。また、津屋崎古墳群の生産基盤として、広く糟屋郡北部から遠賀川河口域まで及び地域を想定する必要があると考えた。八女古墳群と対比すれば、これらの地域におよぶ首長層の連合関係のもとに津屋崎古墳群が形成されたと理解できるだろう。そして、その頂点に80mを超える大型前方後円墳を位置づけることが可能であろう。

一方、岩戸山古墳は主体部の内容が不明であるという難点はあるが、北部九州の前方後円墳では最大規模を誇ることから、有明海沿岸のみならず、北部九州各地の首長層の上に君臨した筑紫君磐井の権勢と対応していると言える。また、岩戸山古墳以降も八女市鶴見山古墳、広川町善蔵塚古墳、八女市乗場古墳と連続的に全長80mを超える大型の前方後円墳が築造されることにより、磐井の乱以後も首長層の結合体を代表する筑紫君の地位は連続していたと推測できよう。9期以降の大型古墳の累代の築造という点でも、津屋崎古墳群と八女古墳群は類似している。

このように津屋崎古墳群の動向は八女古墳群と対比が可能であり、古墳間の複雑な階層性の点では八女古墳群を凌駕する感がある。また、筑紫君磐井の乱は北部九州各地を巻き込んだ事件であったとされるが、八女古墳群とほぼ同規模あるいはそれ以上の大型古墳群を形成した宗像地域は、筑紫君磐井の乱の基盤となった首長間の連合体には属していなかった可能性が高い。想像に過ぎないが、筑紫君と対抗するように、あるいは筑紫君の存在を牽制する役割を担って津屋崎古墳群、ひいては宗像君が台頭したような事情も考えられよう。

### 3. 古墳時代前期・中期前半の北部九州の対外交渉

#### (1) 西新町遺跡における対外交渉

##### a) 遺跡の概要

後述するように古墳時代中期後半以降の宗像地域では多数の渡来人の存在が推測され、その首長層は朝鮮半島との対外交渉に深く関与したと想定される。それに先立つ古墳時代前期には、福岡市西新町遺跡が北部九州地域と朝鮮半島の交易拠点であったと指摘されている(久住2007他)。宗像地域の対外交渉の前史として、ここでその内容を見てみることにしたい<sup>4)</sup>。

西新町遺跡は福岡県福岡市の西部を占める早良平野の北東部、福岡市早良区に位置する(第7図-1)。遺跡が形成された時点では博多湾に近く、海浜砂層で形成された砂丘上の微高地に立地する。

西新町遺跡は北部九州の弥生時代後期終末の土器様式である「西新式」の標識遺跡として注目されてきた。近年の調査により、弥生時代後期終末～古墳時代前期

の多数の竪穴住居跡とともに、各種の朝鮮半島系土器、竪穴住居跡のカマド状遺構が発見され、朝鮮半島からの多数の渡来人の存在が推測されるようになった。

### b) 朝鮮半島系土器の系譜と時期

西新町遺跡では朝鮮半島系の各種土器が出土しているが、その中でも外見的な比較から産地の推定が可能と考えられるものを第8図に示した。

1は陶質の小型丸底壺で、2の慶尚南道金海三東洞遺跡(釜山女子大博物館1984)や慶尚南道馬山縣洞遺跡(昌原大博物館1990)など慶尚南道西部地域に類例が多い。3は陶質で無文の中型丸底壺である。4に慶尚南道金海禮安里古墳群出土品(釜山大博物館1993)を示したように慶尚南道での出土量が多い。ただ、3世紀中頃～4世紀前半と考えられる全羅南道咸平禮德里萬家村古墳群13号墳4号土壙墓(全大博物館2004)、4世紀代の集落遺跡、全羅北道全州中仁洞遺跡原三国時代3号住居跡(全北文化財研究院2008)で、類似する硬質無文の土器が出土している。5は縦方向穿孔の耳をもつ両耳付平底壺である。忠清道・全羅道地域に特徴的な器形であり、搬入品と考えられる。6には全羅北道高敞南山里古墳群出土品(全北文化財研究院2007)を示した。7は平底の両耳付二重口縁壺である。類例として8に全羅北道高敞萬洞遺跡出土品(湖南文化財研究院2004)を示したが、このような器形は4世紀以前の全羅道地域に多いものである。9は瓦質に近い焼成の壺であり、無文の胴部、倒卵形の胴部形態が特徴である。同様の土器は10に示したように全羅北道扶安竹幕洞祭祀遺跡(国立全州博物館1994)から出土している。



第7図 北部九州と馬韓地域との関連遺跡分布

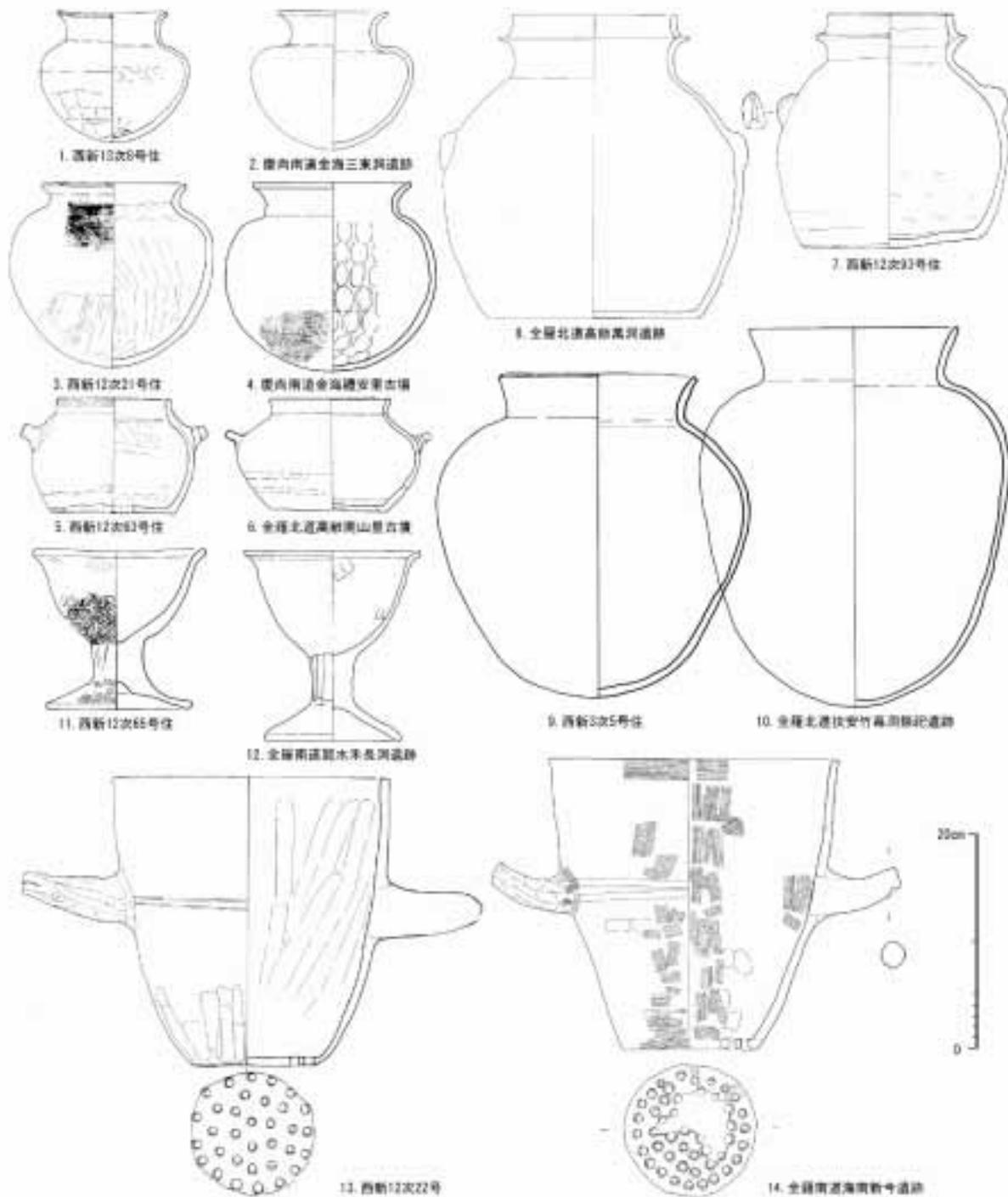
11は赤褐色軟質の高杯である。ブランデーグラス形の器形に、中実の脚部が付く。12に示した全羅南道麗水禾長洞遺跡(順天大博物館2002)出土品と類似している。13は平底の甌であり、同心円状に直径1cmに満たない蒸気孔を多数、配置する。胴部中間に把手を付けるが、胴部外面器壁には把手の割り付け線と思われる沈線が巡る。このような特徴は14に示した全羅南道海南新今遺跡出土品(湖南文化財研究院2005)や全羅南道海南郡谷里貝塚出土品(木浦大博物館1989)と酷似しており、全羅南道からの搬入品と考えられる。

以上に示した例の他にも多数の朝鮮半島系土器が出土しているが、上述のように慶尚南道加耶地域に由来するものもあれば、全羅道さらには一部忠清南道にまで及ぶ馬韓地域のものもある。全体的には後者が多く、朝鮮半島西岸に発し、南岸を経由して北部九州、西新町遺跡にもたらされたと考えられる。

本稿での土師器編年(第1表)に即して述べれば、遺跡内で最古の時期に属する朝鮮半島系土器は2次D区1号住居跡の軟質両耳付壺、12次93号住居跡の両耳付二重口縁壺(第8図-7)、17次38号住居跡の陶質土器壺口縁部等で、土師器編年I期古段階にまで遡る可能性がある。一方、出土した朝鮮半島系土器のうち、12次93号住居跡二重口縁壺、12次63号住居跡両耳付壺(第8図-5)は全羅道を中心に分布する特徴的な器種である。これらの土器を徐賢珠氏(徐賢珠2006)による全羅南道栄山江流域の土器編年に照らすと、I-1期～I-2期にその中心があり、I-1期は3世紀中葉～後葉、I-2期は4世紀前葉～中葉とされる。また、12次93号住居跡出土二重口縁平底壺は前述のように第8図-8の全羅北道高敞萬洞遺跡12号墳木槨墓出土品と類似する。徐賢珠氏(徐賢珠2008)は栄山江流域の3～5世紀古墳埋葬施設出土遺物の共伴関係の2期に位置づけ、3世紀後半と考えている。上述した西新町遺跡の編年と矛盾はなく、西新町遺跡が北部九州と朝鮮半島との交易の窓口として機能していた時期を、おおむね古墳時代前期としても無理はないと思われる。

### c) カマド付竪穴住居跡

西新町遺跡では古墳時代前期の日本国内の他遺跡でほとんど例をみないカマド付竪穴住居跡が多数検出さ



第8図 西新町遺跡出土の朝鮮半島系土器とその類例（1/6、下原編2009から作成）

れている点も特徴である。これまでの22次に及ぶ調査で明らかにされたカマド付竪穴住居跡は106棟を数え、弥生時代後期末～古墳時代前期の竪穴住居跡525基のうちの約20%に相当する。これに対して炉を設置するものがほぼ同数の103基あり、残る300基余りは新しい遺構に壊されるなどの理由のため、カマドないしは

炉の有無が不明の住居である。

同時期の朝鮮半島では、楽浪郡を経由して中国本土ないしは中国東北部の調理様式が受容され、カマドが広く普及する。韓国では近年、原三国～三国時代の集落遺跡の調査が進展しており、壁に沿って長く煙道を伸ばす型式のものは「オンドル状遺構」とも称される。

西新町遺跡のカマドについては韓国でのオンドル状遺構と称されるものと類似するものがあるため、朝鮮半島からの渡来人がもたらした知識によって構築されたことは間違いないだろう。

西新町遺跡のカマドは、住居跡内におけるカマドの位置と煙道の長さから、大きく次のⅠ～Ⅳ類に大別され、さらにⅠ・Ⅱ類はそれぞれa・bに細分されている。このうち事例の多いものには第9図-1～3に示したⅠb類、Ⅱb類、Ⅲ類がある。なお、カマド平面形が「L」字形を呈するⅡb類はオンドル状遺構に相当する。

この時期における朝鮮半島の竪穴住居の類例を見ると、慶尚南道地域では円形プランを基本とし、近年では煙道が長く伸びたカマドを付設する調査例が増加している(第9図-5、咸陽花山里遺跡、慶南發展研究院歴史文化센터2007など)。金羅英氏(金羅英2007)によれば3世紀後葉～4世紀には慶尚北道地域では方形プランにオンドル状遺構を設置したものが多いのに対して、慶尚南道地域では円形プランの住居跡が多い。全羅道地域では長方形または正方形プランのものが多く、慶尚南道地域と対照的である。こうした朝鮮半島の例と西新町遺跡例とを比較する限り、少なくとも竪穴住居の平面形態においては慶尚南道地域からの影響は小さかったものと思われる。

全羅道、忠清道では1遺跡内でのカマドの様相が多様で、複雑である。全羅南道海南郡新今遺跡(湖南文化財研究所2005)では、3世紀中頃とされるⅠ段階では西新町遺跡Ⅲ類と類似するカマドであるが、3世紀後半に相当するⅡ段階では西新町遺跡Ⅱb類に類似するオンドル状遺構(第9図-9)に転換するとされている。これに対して4世紀以降とされる全羅北道益山射徳遺跡(湖南文化財研究所2007a)では、西新町遺跡Ⅲ類と類似するカマドが築造されている。また、4～5世紀に編年される忠清南道鷄龍立岩遺跡(忠清南道歴史文化研究院2008a)では、Ⅲ類に類似するカマドが12基であるのに対し、Ⅱb類に類似するカマドが5基にとどまる。両者は時間的な差ではなく、中小型住居跡に前者が、大型住居に後者が使用されたと推測されている。したがって、朝鮮半島西南部地域では小地域ごとに多様な形態のカマドが築造された可能性がある。

西新町遺跡に並行する時期の百済の王城、ソウル市風納土城遺跡(国立文化財研究所2001)では、六角形の住居跡に壁から煙道を離れたカマドが設置され(第9図-4)、住居跡の平面形は別とすると西新町遺跡カマドのⅠb類と同様の構造となっている。風納土城のカマドが西新町遺跡に直接的な影響を与えた可能性は小さいと推測されるが、朝鮮半島西海岸～南海岸地域の海沿いの交流のもとに展開した多様なカマドが西新町遺跡に流入した結果、Ⅰb類が成立したと想定されよう。

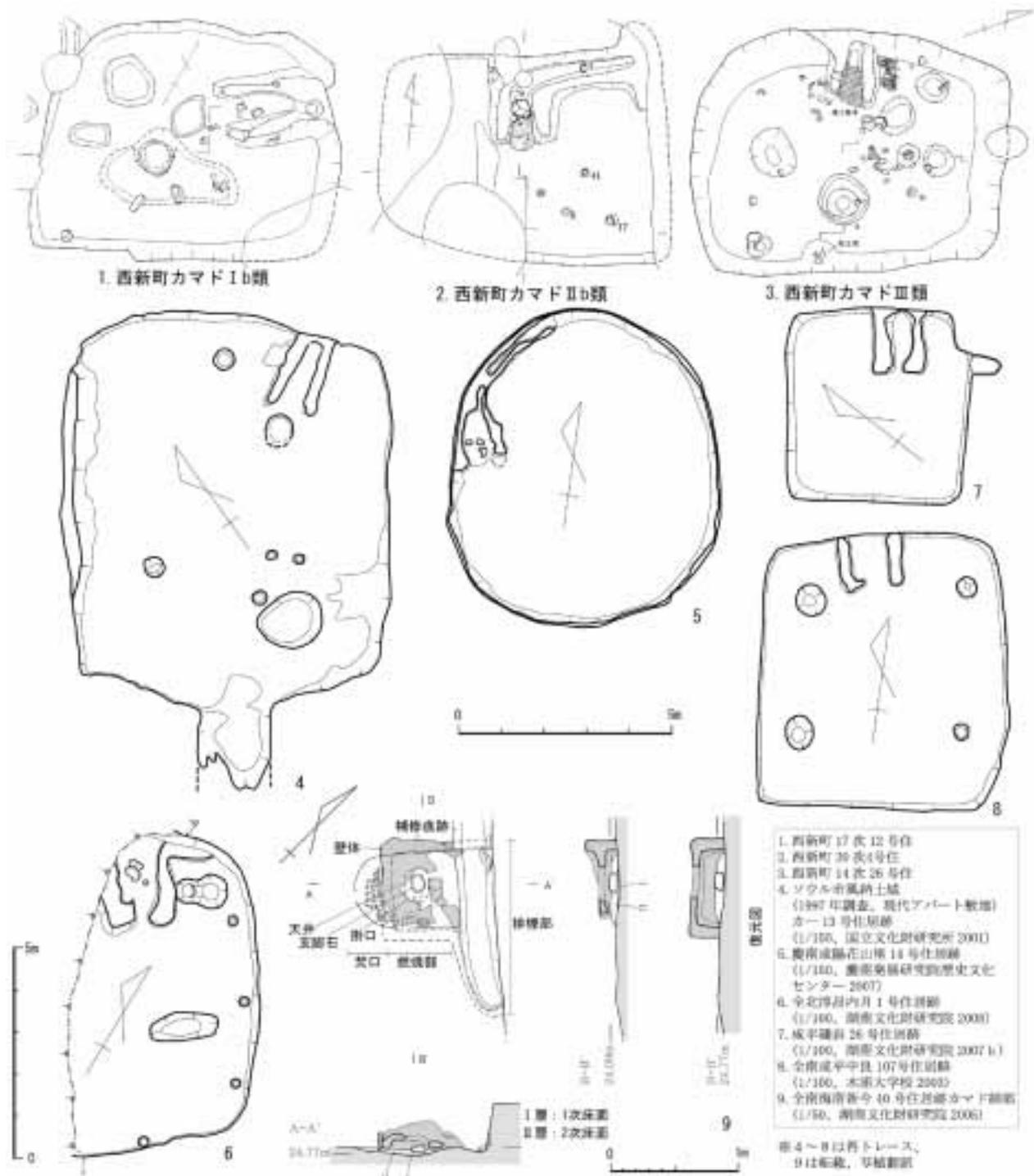
西新町遺跡におけるカマドは渡来人の知識、技術無しには成立しがたいと考えられ、その数から相当数の渡来人が存在していたと考えることが妥当であろう。また、前述した朝鮮半島系土器とカマドの故地が一致するので、渡来人は朝鮮半島西海岸～南海岸の人々を中心としたと考えられよう。

ただし、西新町遺跡のカマド付住居跡は周辺地域には波及しなかったと解釈されている(武末2010他)。また、西新町遺跡では古墳時代初頭以降に畿内系土師器とともに、山陰、吉備等西日本各地の土器が出土する。したがって、朝鮮半島からの渡来人とともに、西日本各地から移動してきた人々も居住していた可能性が高い。まさに、朝鮮半島への交通の窓口として、交易拠点として機能していた姿が推測できよう。

## (2) 鳥足文土器の出現と馬韓系渡来人

西新町遺跡は朝鮮半島西岸～南岸の地域との交通・交易の拠点であり、朝鮮半島西南部の馬韓を中心とした地域からの渡来人の存在が想定された。西新町遺跡は古墳時代前期末、土師器編年Ⅱ期末には終焉を迎えており、その後、北部九州においてどこが朝鮮半島との交易拠点となったかは大きな問題である。

ところで、朝鮮半島の鳥足文土器は4世紀前半に百済中心部で定型化した土器であるが、馬韓地域に分布の中心がある(金鍾萬2010)。北部九州でもいくつかの出土例があり、抽出が容易であることに加えて、在来の土器との融合の過程を示す事例もある。そこで、ここでは鳥足文土器を手がかりに、4世紀末～5世紀前半の馬韓からの渡来人の動向を考えてみることにしたい<sup>5)</sup>。

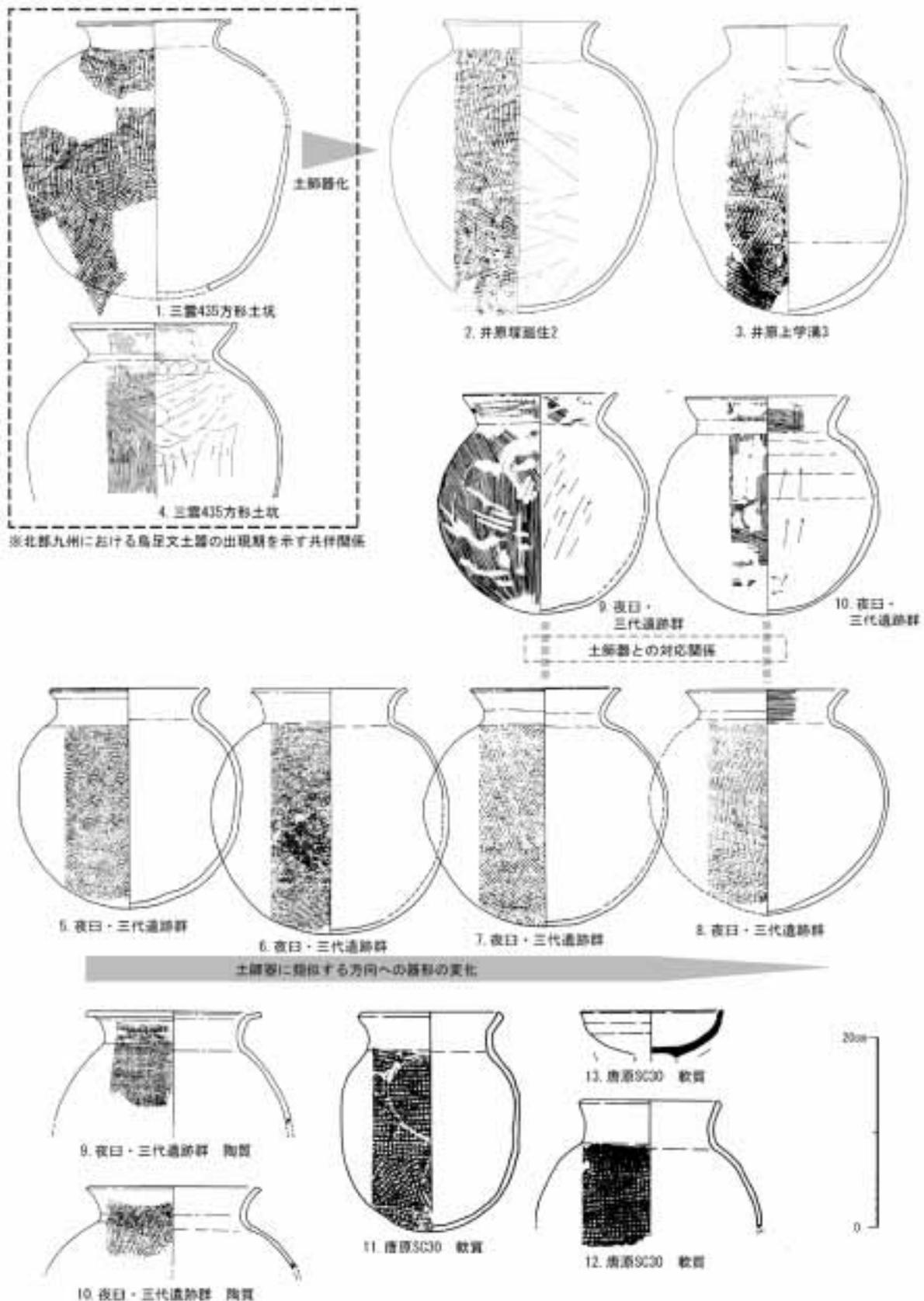


第9図 西新町遺跡出土のカマド付竪穴住居跡と朝鮮半島の類例（下原編2009を改変して作成）

『魏志倭人伝』に登場する「伊都国」の拠点集落と考えられる福岡県糸島市三雲・井原遺跡群（第7図 - 3）では、古墳時代においても各調査地点で朝鮮半島系土器が出土する。その中で注目される資料が軟質で鳥足文に近いタタキを施す三雲435番地方形土坑（第10図 - 1、牟田・岡部編2002）、井原塚廻2号住居跡（第10図 - 2、

林1992）、井原上学遺跡3号溝（第10図 - 3、岡部1987）の土器である。この3点の土器を子細に見ると、三雲435番地の資料は口縁部及び胴部は馬韓系土器本来の形態を維持しているが、井原塚廻2号住居跡、井原上学3号溝の資料は鳥足文タタキを施しながら器形そのものは土師器甕に近づいている。それぞれの時期は三

③ . 宗像地域における古墳時代首長の対外交渉と沖ノ島祭祀



第10図 系島市三雲・井原遺跡群、新宮町夜臼・三代遺跡群、福岡市唐原遺跡出土の朝鮮半島系土器と関連資料 (1/6、各報告書より転載して作成)

雲435番地 = 土師器編年Ⅲ A期、井原塚廻2号住居跡 = Ⅲ B期、井原上学3号溝 = Ⅳ期であり、土師器化の進展は時間的変化とも対応している。

このような過程が渡来してきた土器製作工人の規範の変化を示唆するとすれば、三雲・井原遺跡群における馬韓地域からの渡来人の存在、さらにはその定着を物語る資料となろう。ただ、三雲・井原遺跡群では三雲遺跡堺Ⅰ - 4区6号住居跡から把手脚付短頸壺と大甕(小池編1983)が出土しており、これらは加耶系と考えられる。三雲・井原遺跡群では加耶からの渡来人も存在した可能性が想定される。このような複数地域からの人々の渡来という点から、三雲・井原遺跡群が先行する西新町遺跡の役割を代替している可能性が考えられる。

また、福岡県新宮町夜臼・三代遺跡群大森地区(第7図 - 4)から、Ⅲ B期を中心とする土師器とともに大型の軟質土器壺及び鳥足文風のタタキで仕上げた軟質土器(第10図 - 5 ~ 8)がまとめて出土した(西田1994)。これらの土器には、馬韓地域の鳥足タタキ文土器と類似する器形(第10図 - 5)もあれば、北部九州地域の土師器甕と類似した器形(第10図 - 7・8)もある。三雲・井原遺跡群と同様に、馬韓からの渡来人が、土師器を模倣して製作したものと考えられる(重藤1998、白井2001)。これらの軟質土器とともに陶質土器壺(第10図 - 9・10)も出土しているが、これも馬韓系土器であろう。

この他に興味深い資料として、夜臼・三代地区遺跡群とも程近い福岡市東区唐原遺跡SC30(第7図 - 5)より出土した軟質土器甕(第10図 - 11・12)がある(小林編1989)。共伴する土師器はⅢ A期である。軟質土器甕は大振りの格子タタキで仕上げられ、口縁部形態、胴部形態も特徴的なものである。朝鮮半島における系譜・類例を具体的に指摘することはできないが、慶尚道地域のものではないようであり、消去法的に考えれば忠清道~全羅道地域に由来する可能性がある。同遺構からは北部九州地域の土師器はもちろん、慶尚南道咸安地域のものとも推測される陶質土器高杯(第10図 - 13)、東海系台付甕破片、畿内系と推測される高杯等各地の土師器も出土している。したがって、軟質土器甕の製作地等が決定できれば、広域的な土器の移動、

さらには当該期の交易関係の実態を知ることのできる資料となろう。

また、このような夜臼・三代地区遺跡群、唐原遺跡群の動向は、古墳時代前期の馬韓の人々が博多湾沿岸、西新町遺跡までを行動範囲としたのに対して、中期初頭以降、より東方へと移動を拡大させたことを示すものと言えるだろう。

### (3) 横穴式石室の出現

北部九州地域では4世紀後葉にまで遡る前方後円墳編年4期、古墳時代中期初頭に横穴式石室が出現し、5世紀を通じて普及する。これら日本の他地域に先行して北部九州地域で出現、普及した古墳時代中期の初期横穴式石室を「北部九州型初期横穴式石室」と呼ぶ。筆者は首長墓を中心に採用される玄室幅1.5m、玄室長2.5m以上の大型のものを初期横穴式石室A類とし、それ以下の小型を初期横穴式石室B類と分類している<sup>6)</sup>。

これら北部九州型初期横穴式石室の起源は朝鮮半島にあることは疑いない。ただ、5世紀の新羅の王都、慶州周辺では横穴式石室は見られない。また、後に新羅の傘下におさめられた国々も含めた加耶諸国では「竪穴系横口式石室」と呼ばれる横穴式石室の影響を受けて在来の竪穴式石槨に横口を設けた石室が存在するが、その一般化は5世紀中頃以降のことである。したがって、具体的な祖型を特定することは難しいが、北部九州型初期横穴式石室の起源は当時、横穴式石室を築造していた漢城期の百濟あるいは楽浪郡故地に想定される。

津屋崎古墳群中では勝浦峯ノ畑古墳、勝浦井ノ浦古墳が初期横穴式石室の代表的な事例と言える。また、宗像地域では北部九州型初期横穴式石室B類を埋葬施設とする古墳が多いことも指摘されている。これら北部九州型初期横穴式石室は、古墳時代中期前半の渡来人の動向、あるいは北部九州と朝鮮半島南部との交流を物語る重要な資料と位置づけられる。そこで、『前方後円墳編年』の5期以前の北部九州型初期横穴式石室とそれに関連する横穴式石室を一覧として示したものが第2表であり、その分布を示したものが、第11図である<sup>7)</sup>。これによればこの時期の北部九州型初期横

③ . 宗像地域における古墳時代首長の対外交渉と沖ノ島祭祀

第2表 前方後円墳編年4～5期における北部九州型初期横穴式石室（重藤1999を改変）

No.	古墳名	所在地	墳形・規模	古墳編年	石室分類	地割図	開口部構築技法	備考
1	谷口古墳東石室	佐賀県唐津市	前方後円-77	4期	(特殊型)	無描	—	長円型石室
2	谷口古墳西石室	佐賀県唐津市	前方後円-77	4期	(特殊型)	無描	—	長円型石室
3	徳島古墳	福岡市南区	前方後円-62	4期	A類	両描	割石小口積	箱式石棺、埴床、塚棺
4	老司古墳1号石室	福岡市南区	前方後円-76	4期	B類	無描	—	
5	老司古墳2号石室	福岡市南区	前方後円-76	4期	B類	無描	—	
6	老司古墳3号石室	福岡市南区	前方後円-76	4期	A類	両描状	割石小口積	
7	老司古墳4号石室	福岡市南区	前方後円-76	4期	B類	無描	—	
8	狭島塚東古墳	熊本県荒尾市	円	4期	B類	両描状	割石小口積	埴床
9	黄金山古墳	福岡県大村市	不明	5期	B類	両描	割石小口積	
10	双水柴山2号墳	佐賀県唐津市	円-23.5	5期	B類	片描	割石小口積	
11	横田下古墳	佐賀県唐津市	円-25	5期	A類	片描意識した両描	割石小口積	箱式石棺、埴床
12	丸腰山古墳	福岡市南区	前方後円-65	5期	A類	両描?	板石?	箱式石棺
13	久保原丸山2号墳	佐賀県佐賀市	円-12.6	5期	肥後型との近親	両描	板石+小口積	埴床
14	五木黒木丸山古墳	佐賀県佐賀市	円-34	5期	肥後型との近親	両描	板石+小口積	
15	藤山甲塚古墳	福岡県久留米市	前方後円-79	5期	肥後型との近親	両描	割石小口積	石障
16	城2号墳	熊本県宇土市	円-25	5期	A類	両描	割石小口積	埴床
17	釜塚古墳	福岡県南原市	円-26	5/6期	A類	両描	板石	
18	武蔵古墳1号石室	福岡県南原市	円-33	5/6期	A類	両描	板石	埴床



第11表 前方後円墳編年4～5期における北部九州型初期横穴式石室の分布（重藤1999を改変）

穴式石室は福岡平野より西の玄界灘沿岸地域及び有明海沿岸地域に限定されている。また、第2表及び第11図に示していないが、熊本県に分布する平面方形の玄室プランで石室内に石障を設置する肥後型初期横穴式石室もこの時期には登場している可能性が高い。これに対して、今後、発見される可能性は皆無とは言えないが、現在のところ宗像地域にはこの時期の横穴式石室は分布していない。

前方後円墳編年5 - 6期の宗像地域の首長墓級の古墳である福津市奴山正園古墳、福津市宮司井手ノ上古

墳では箱式石棺、木棺を使用しない小型の縦穴式石室である「石棺系縦穴式石室」を埋葬施設としている。横穴式石室の普及はこれに遅れるものと考えておきたい。また、北部九州型初期横穴式石室B類は宗像地域に多いとはいえ、前方後円墳編年5期以前の例は福岡市老司古墳(吉留・他編1989)と唐津市双水柴山2号墳(中島編1987)に限られる。したがって、福岡平野より西の玄界灘沿岸地域で成立した北部九州型初期横穴式石室B類が、前方後円墳集成編年6期以降に宗像地域に普及したものと考えられよう。

前述のように鳥足文土器の分布から、古墳時代中期前半に糸島市三雲・井原遺跡群において馬韓からの渡来人の存在が想定された。北部九州型初期横穴式石室の祖型は百済等に求められるので、横穴式石室の導入に際して、西新町遺跡以来の馬韓との交流が基礎になったと考えられる。

#### 4. 宗像地域における渡来人関係の資料

##### (1) 古墳時代中期前半における宗像地域と朝鮮半島

宗像地域では古墳時代中期前半には横穴式石室は分布せず、馬韓系土器も少ない。また、この時期のまとまった集落遺跡の調査例が少ないため、集落における朝鮮半島からの渡来人の動向が不明であることも事実である。そのような資料的制約の中で、前方後円墳編年5～6期に位置づけられる福津市宮司井手ノ上古墳、

福津市奴山正園古墳から特徴的な陶質土器が出土していることは注目される(第12図)。

第12図 - 1は前方後円墳編年5期に位置づけられる宮司井手ノ上古墳の陶質土器壺であり、肩部の耳状突起が特徴的である。このような特徴のものは馬韓地域での出土例が少なく、加耶に多いため、搬入品の可能性が考えられる。第12図 - 2 ~ 4は前方後円墳編年6期前後の奴山正園古墳出土の陶質土器である。2は高杯形器台で、鉢部の粗雑な鋸歯文が目される。高杯形器台は初期須恵器及び加耶の陶質土器に特徴的な器形をなしているが、このような粗雑な鋸歯文は陶邑出土の初期須恵器及び加耶の陶質土器には見られない。この点を考慮すると、加耶からの技術導入のもとに在地生産された可能性が高い。3は壺の頸部と考えられ、現状では3段に区画して波状文を施す。加耶では慶尚北道高靈を中心とする大加耶地域に多いものであり、搬入品の可能性も考えられる。

先に、中期前半における横穴式石室の導入において福岡平野より以西の玄界灘地域と有明海沿岸地域が先行したことが考えられた。また、福岡平野以西の玄界灘沿岸地域における古墳時代前期以来の朝鮮半島との交流により横穴式石室が導入され、糸島半島等に居住した馬韓系の渡来人がそれに関与したと想定した。宗像地域には中期前半の初期横穴式石室が分布しないが、逆に言えば、上述したような陶質土器の流入、あるいは須恵器の生産はそれとは異なるルートによるもの、すなわち宗像地域が加耶との独自の交通路を確立したことを示す資料と考えても良いかもしれない。今後、当該期の渡来人の動向を物語る集落遺跡、生産遺跡の解明が期待される。

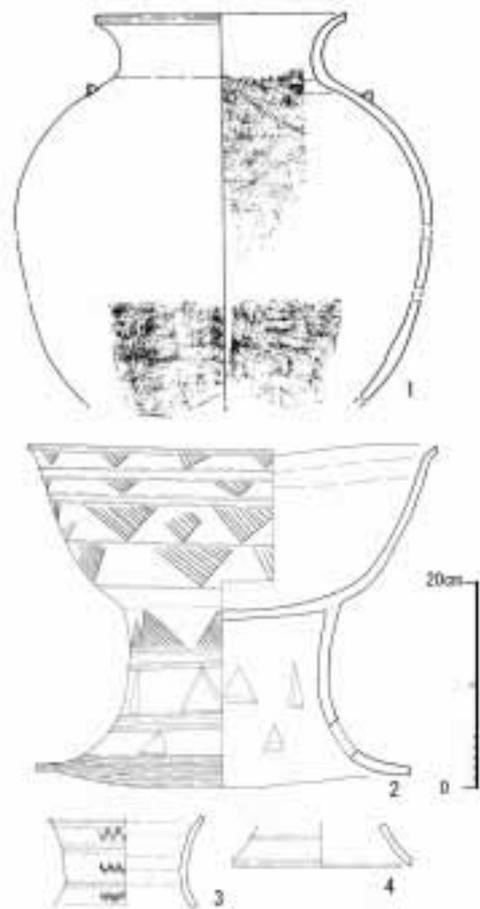
## (2) 古墳時代中期後半以降の宗像地域の渡来人

### a) 朝鮮半島系土器の出土遺跡と渡来人

津屋崎古墳群の間に位置する集落遺跡(第1図 - A ~ C)、福津市在自遺跡群(在自小田遺跡・在自上ノ原遺跡・在自下ノ原遺跡、池ノ上他編1994・池ノ上他編1995・池ノ上他編1996b)、福津市生家釘ヶ裏遺跡(池ノ上他1998)、福津市奴山伏原遺跡(池ノ上2002a)では、古墳時代中期後半以降の馬韓地域と関連する資料を含む朝鮮半島系遺物・遺構が、集中的に確認されて

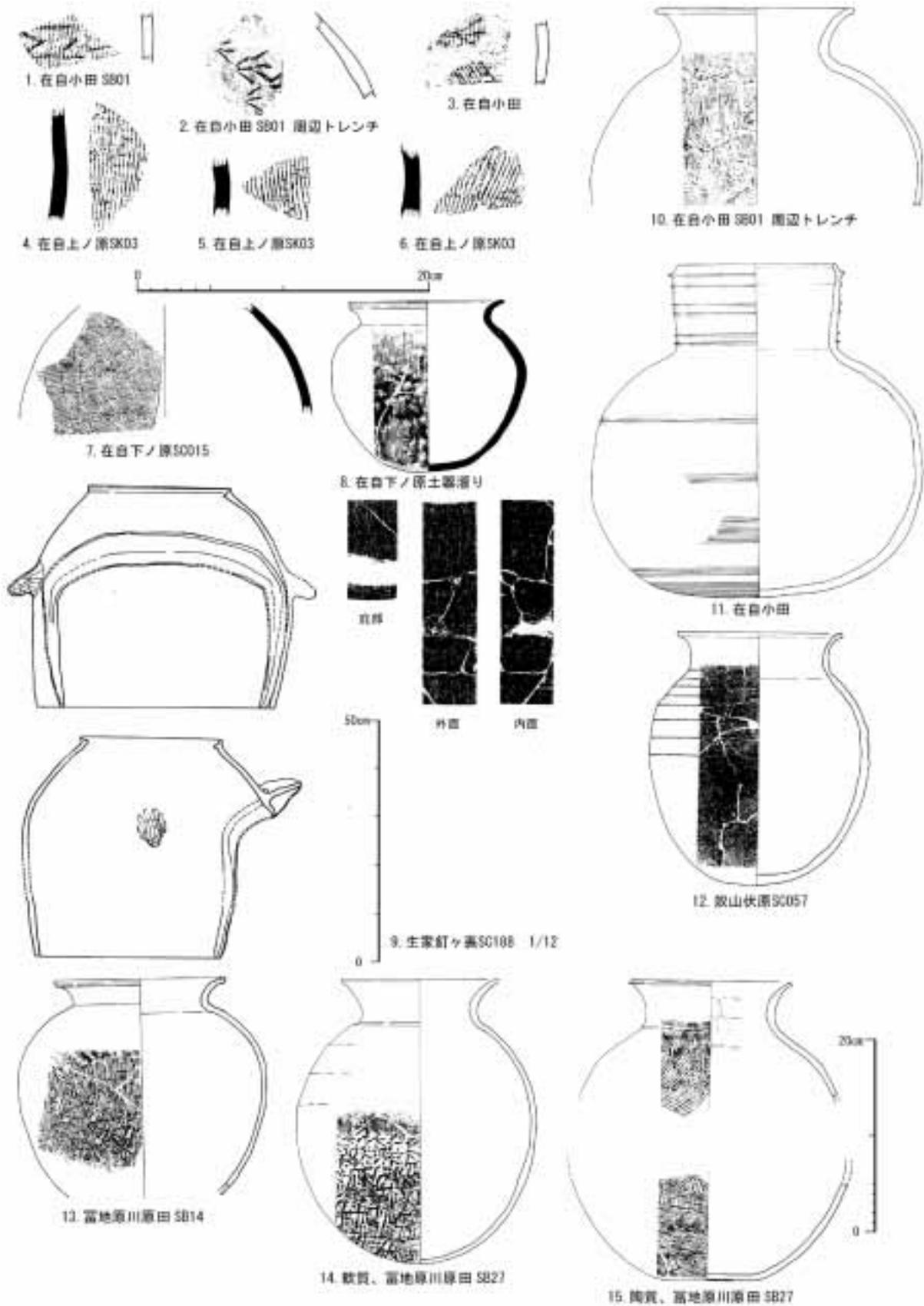
いる<sup>8)</sup>。

馬韓系の鳥足文土器は在自遺跡群で破片(第13図 - 1 ~ 7)が出土している。このうち第13図 - 1 ~ 3の鳥足文土器破片の出土した在自小田遺跡 SB01は四面廂を備えた大型の掘立柱建物であり、隣接して滑石製紡錘車・白玉と土器等が出土した祭祀土坑 SK04がある(第14図)。SK04からはTK208型式の須恵器、IV期後半の土師器が出土していて、SK04とほぼ主軸を揃えている SB01も同時期であろう。SB01は一般の集落では見られない規模、構造の建物であり、首長の執り行なう祭祀に係わる建物と推測される。そこでの祭祀に馬韓系の土器が使用されたとは断定できないとしても、首長層と馬韓からの渡来人との密接な関係を想定しても大過ないであろう。ただし、在自小田遺跡では大加耶系陶質土器壺(第13図 - 11)も出土しているので、首長層と朝鮮半島との関係は馬韓に限られないことも

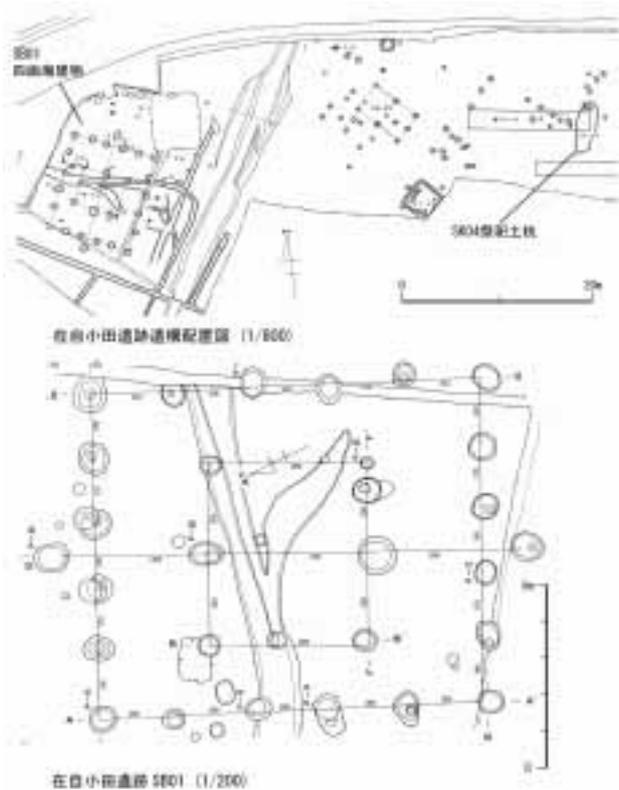


第12図 宮司井手ノ上古墳・奴山正園古墳出土の陶質土器(1/6、1は宮司井手ノ上古墳、他は奴山正園古墳、報告書より転載)

③ . 宗像地域における古墳時代首長の対外交渉と沖ノ島祭祀



第13図 宗像地域の集落遺跡出土の朝鮮半島系土器（9は1/12、1～6は1/4、他は1/6、各報告書より転載）



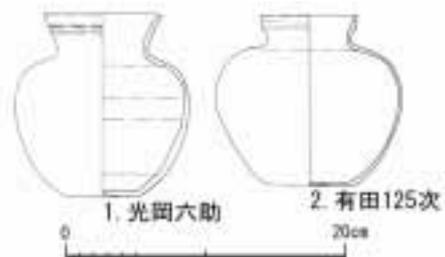
第14図 在自小田遺跡遺構配置図とSB01平面図  
(池ノ上編1994から転載)

指摘できよう。

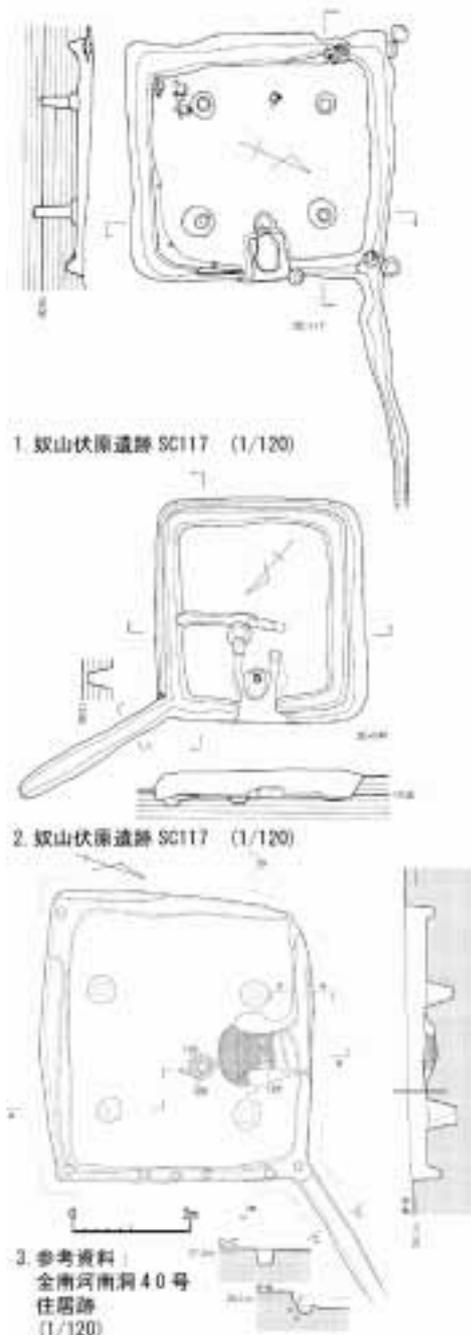
在自上ノ原遺跡 SK03から出土した鳥足文土器(第13図 - 4 ~ 6)もⅣ期後半の土師器を伴う。在自下ノ原遺跡 SC015から出土した鳥足文土器(第13図 - 7)はMT85型式頃の須恵器が共伴している。

この他に在自下ノ原遺跡土器溜り遺構出土の陶質甕(第13図 - 8)、奴山伏原遺跡 SC057住居跡から出土した軟質甕(第8図 - 12)も器形から考えれば馬韓系土器の可能性が高い。前者はTK23型式の須恵器を、後者はMT15型式の須恵器を伴う。生家釘ヶ裏遺跡 SC188号住居跡出土の外面にタタキを施した移動式カマド(第13図 - 9)も特異なもので、朝鮮半島との関係が想定される。

一方、釣川流域(第1図 - D ~ H)では、MT15型式の須恵器を伴う宗像市富地原川原田遺跡 SB14竪穴住居跡(白木1994)で鳥足文土器(第13図 - 13)が出土している。同遺跡では土師器Ⅳ期のSB27竪穴住居跡から、車輪文風の特異なタタキを施した軟質土器甕や陶質土器壺(第13図 - 14・15)も出土している。初期のカマド付竪穴住居を含むことから、集落内に渡来人が居住し



第15図 光岡六助遺跡出土陶質土器とその類例  
(1/6、各報告書より転載)



第16図 竪穴外排水溝を伴う竪穴住居  
(各報告書より転載)

た可能性が高い。また、宗像市冨地原森遺跡 SB16あるいは遺構には伴わない資料であるが、宗像市光岡六助遺跡出土の平底傾向の壺(第15図 - 1、白木1995)も全羅南道咸平昭明洞遺跡2号住居跡出土土器(全南大博物館2003)と類似するため馬韓系土器の可能性が高い。同様の例として、土師器Ⅳ期でも古い時期に属する福岡市早良区有田遺跡125次 SC01出土土器(第15図 - 2、山崎編1993)があり、その時期を知ることができる。

#### b) 竪穴外排水溝を伴う竪穴住居

宗像地域では竪穴住居においても馬韓系渡来人との関連が抽出できる可能性がある。奴山伏原遺跡では排水溝と推測される溝が竪穴外に長く伸びた古墳時代では例の少ない特異な構造の竪穴住居跡がまとめて検出されている(第16図 - 1・2)。

同種の排水溝をもつ竪穴住居跡は慶尚南道昌寧桂城里遺跡(우리文化財研究院2008)にも例があるが、近年、全羅北道益山射徳遺跡(湖南文化財研究院2007a)、光州市河南洞遺跡(第16図 - 3、湖南文化財研究院2008b)、全羅南道潭陽梧山遺跡(湖南文化財研究院2007c)など、全羅道を中心とする馬韓の集落遺跡での事例が増加しているようである。

釣川流域の土師器Ⅳ期以降の集落遺跡ではこの種の竪穴住居が多く、本地域に多くの馬韓系渡来人が居住していたことを示唆する。さらに、同様の竪穴住居は福津市よりも東に位置する遠賀郡岡垣町友田遺跡群(中川編1989、大坪他2008、第7図 - 8)、遠賀郡遠賀町尾崎・天神遺跡(武田1991、第7図 - 9)でもみられる。津屋崎古墳群と関連の深い首長層のもとに集まった馬韓系渡来人が周辺に拡散したことも想定すべきであろう。

#### c) 宗像地域における須恵器・鉄器生産

宗像地域の古墳時代須恵器窯跡には、50ヶ所を超える須恵器散布地が確認され、一部の調査が実施されている須恵古窯跡群(宗像窯跡群、第1図 - I)が挙げられる(花田2002)。須恵須賀浦窯跡群、稲元日焼原窯跡群などの支群に分かれるが、花田氏、岡田裕之氏(岡田2003)の研究によれば、MT15型式頃に操業を開始し、

6世紀を中心とした窯跡群と解釈される。北部九州最大の須恵器窯跡群には福岡県大野城市牛頸古窯跡群があり、この他に6世紀の大規模な窯跡群としては八女古墳群と近接する八女古窯跡群がある。須恵古窯跡群は6世紀においてはそれらを凌駕する生産規模が推定されることに加えて、牛頸窯跡群、八女古窯跡群より先行して形成された可能性が高い。先にみた八女古墳群を凌駕するような宗像地域の大型古墳の構成が生産遺跡の規模にも反映していると考えられる。また、須恵古窯跡群の形成に朝鮮半島からの渡来人が深く関与したことは想像に難くない。須恵古窯跡群は釣川中流域北岸の首長墓系列19と重なるが、供給圏はその範囲に限定できないと考えられる。やはり、その生産には津屋崎古墳群に葬られた首長層の関与が想定されよう。

この他に、久原瀧ヶ下遺跡(5世紀後半)で羽口が出土し、野坂一町間遺跡(5世紀後半)で鍛冶炉2個所、武丸高田遺跡(6世紀後半)で鍛冶炉が検出され、渡来人との関連が問題となる(花田2002)。新原奴山1号墳では鍛冶工具が出土し、首長層が鍛冶工人を掌握していたと推定されるが、その生産遺跡は釣川流域にまで及んでいた可能性が高い。また、遠賀川流域の遠賀町尾崎・天神遺跡で6世紀後半の鍛冶炉が検出され、隣接する岡垣町瀬戸遺跡(中川編1990)では同時期の製鉄炉が検出されている。

先に津屋崎古墳群の首長層の生産基盤を釣川流域、さらにはそれを越えた地域にまで広げて考える必要性を指摘したが、これら生産遺跡の動向はそれを支持するものと解釈できよう。

#### d) 渡来人の墓地について

古墳時代中期の北部九州地域における朝鮮半島からの渡来人に関わる墓地としては福岡県朝倉市池の上・古寺墳墓群が著名である。池の上・古寺墳墓群では陶邑産とは異質で加耶の陶質土器と酷似した初期須恵器や、例の少ない初期馬具などが出土している。また、古墳時代中期の日本では一般的でない主体部に土器を副葬する古墳が集中している。同時期の朝鮮半島における木槨墓・石槨墓などの主体部内への土器の副葬の葬送儀礼をそのまま再現したものであり、土器の副葬

そのものが渡来人との関連の深い葬送儀礼と考える。

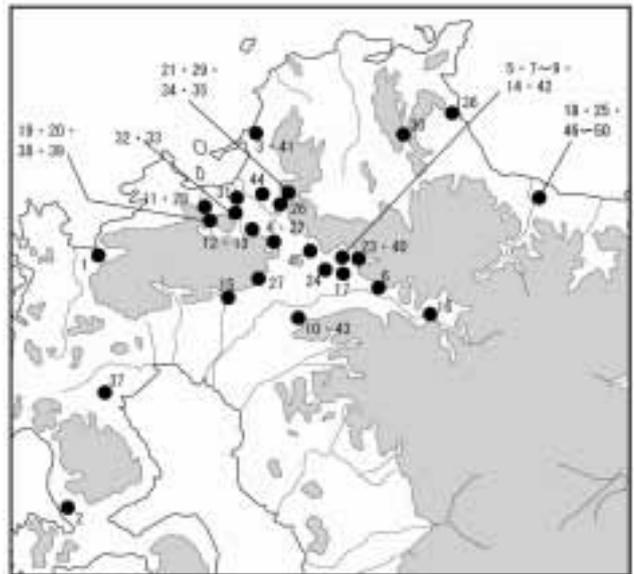
古墳時代中期において、池の上・古寺墳墓群と同様に土器を主体部内に副葬した古墳の分布を見ると(重藤2010b)、池の上・古寺墳墓群のみならず、いくつかの例がみられる(第17図)。しかしながら、宗像地域においては馬韓を中心とした朝鮮半島からの渡来人の痕跡が濃密であるにもかかわらず、主体部内に土器を副葬する古墳が見られないことは特筆される。今後、まとまって渡来人の墓地が発見される可能性も皆無ではないが、古墳時代中期に属する古墳の調査例は豊富でありながら現時点では発見に至っていないので、渡来人であっても宗像地域の集団に溶けこみ、他の古墳と同様の葬送儀礼で葬られた可能性も一方では考慮しておきたい<sup>9)</sup>。

### (3) 小結

以上に見た渡来人に関わる資料は、総じて言えば、古墳時代中期後半以降に増加したと理解できる。その画期としては、在自小田遺跡 SB01あるいは富地原川原田遺跡 SB27住居跡の頃に求められる。土器および古墳の編年に即して言えば、土師器編年Ⅳ期、陶器須恵器編年 TK216~TK208型式、前方後円墳編年7期の頃である。

その際、中心となったのは馬韓からの渡来人であった。上述のように、古墳時代前期の馬韓との交易拠点となった遺跡として福岡市西新町遺跡がある。また、中期前半の横穴式石室の導入を主導した地域として福岡平野より西の玄界灘沿岸地域、有明海沿岸地域が想定され、そこにも馬韓からの渡来人の関与が考えられた。これら馬韓からの渡来人の東への広がりには中期前半に進むと考えられるので、中期後半に宗像地域でその数が増加することと合致しているといえよう。

ただし、中期前半において宮司井手ノ上古墳あるいは奴山正園古墳出土の陶質土器から加耶との交流が推測された。中期前半以前に宗像地域が馬韓の人々を媒介としない朝鮮半島との交易、交流関係を形成していたかどうか、さらにはそれに関係する渡来人の動向を物語る遺跡の解明が今後の問題となろう。また、中期後半を中心とする在自小田遺跡においても大加耶系陶質土器が出土している。したがって、宗像地域の渡



第17図 古墳時代中期の北部九州における主体部内土器副葬古墳の分布  
(重藤2020bを改変して転載)

来人には馬韓以外の人々も存在していたし、首長層の対外交渉も馬韓に限定されることがなかったと考えられる。

## 5. 勝浦峯ノ畑古墳・勝浦井ノ浦古墳にみる対外交渉

### (1) 勝浦峯ノ畑古墳の馬具と装身具

勝浦峯ノ畑古墳は津屋崎古墳群における大型古墳の築造の契機となった前方後円墳である。1976年に実施された後円部横穴石室の発掘調査により、攪乱を被ってはいったものの、多数の重要な副葬品が出土した。そのうち金銅製をはじめとする装身具と馬具は、被葬者の対外交渉を物語る資料であり、ここで簡単に紹介し、その意義を考えることにしたい<sup>10)</sup>。

#### a) 装身具

金銅製装身具は細片となっているが、幅および高さ0.8cm程の横断面U字形の金銅金具片が何点が含まれる。その中には、小片ではあるが、内側に薄い金銅板片が残るものもある。大きさやこのような特徴から尖縁式冠帽(毛利光1995)の縁金具と考えられる。また、歩揺付きの金銅製透彫金具破片も多数見られる。これらは、金銅製冠帽縁金具と一連となる可能性が考えられる。その場合、熊本県江田船山古墳(本村1990)、福

井県十善の森古墳、大阪府峯ヶ塚古墳(十善の森、峯ヶ塚については毛利光1995を参照した)出土の龍文などを透彫りした金銅製冠帽と同様のものではと推測される。本古墳は江田船山古墳に若干、先行する可能性が高く、日本出土の冠帽では最古級の資料と考えられる。

江田船山古墳出土の冠帽は百濟製と考えられており(桃崎2008、李漢祥2008)、本例も同様に位置づけられよう。忠清南道公州市水村里4号墳(李勲2007、李漢祥2008)からは龍文金銅製透彫冠帽が、忠清南道瑞山市富長里遺跡5号墳1号土壇墓(忠清南道歴史文化研究院2008b)からは亀甲龍鳳文金銅製透彫冠帽が出土している。これらは百濟漢城期の製作と考えられており、江田船山古墳もその可能性が指摘されている(桃崎2008)。勝浦峯ノ畑はこれらのものと同様に百濟からの舶載品で、漢城期にまで遡ると考えられる。

また、極小型の高杯状の鉄製品の杯形部に直径5mm程の紺色のガラス玉を嵌めた小片がある。基部は板状をなし、下端は穿孔により別製品に接合されていたようである。十善の森古墳、峯ヶ塚古墳では金銅製冠帽の表面をガラス玉で装飾しているが、ガラス玉の接合方法が異なる。むしろ、全羅南道羅州市新村里9号墳乙号棺出土の金銅製冠帽とセットになる金銅製冠の立飾頂部のガラス玉の接合法に類似している(国立光州博物館の展示図録を参考とした)。新村里9号墳乙号棺出土例と同様の冠が、上述の冠帽に伴った可能性も想定しておきたい。

また、金銅製の歩揺とは別に直径5mm前後の金製歩揺も含まれる。冠帽に伴うと考えられる金銅製歩揺とは別製品で、例えば垂飾付耳飾等に伴う可能性が考えられる。鉸具の馬蹄形金具と推測される破片もあり、そうであるとすれば龍文等を透彫りした金銅製帯金具の鉸具に近い。他に円環系有刻型銅釧の破片も出土している。

勝浦峯ノ畑古墳出土の金銅製装身具は細片と化しており、全形を知ることができないものが多い。しかし、上述したように、龍文透彫金銅製冠帽、金銅製釧の存在はほぼ確実であり、金銅冠、垂飾付耳飾、金銅製帯金具が存在した可能性も指摘できた。熊本県江田船山古墳出土の副葬品に相当する構成がイメージでき、古

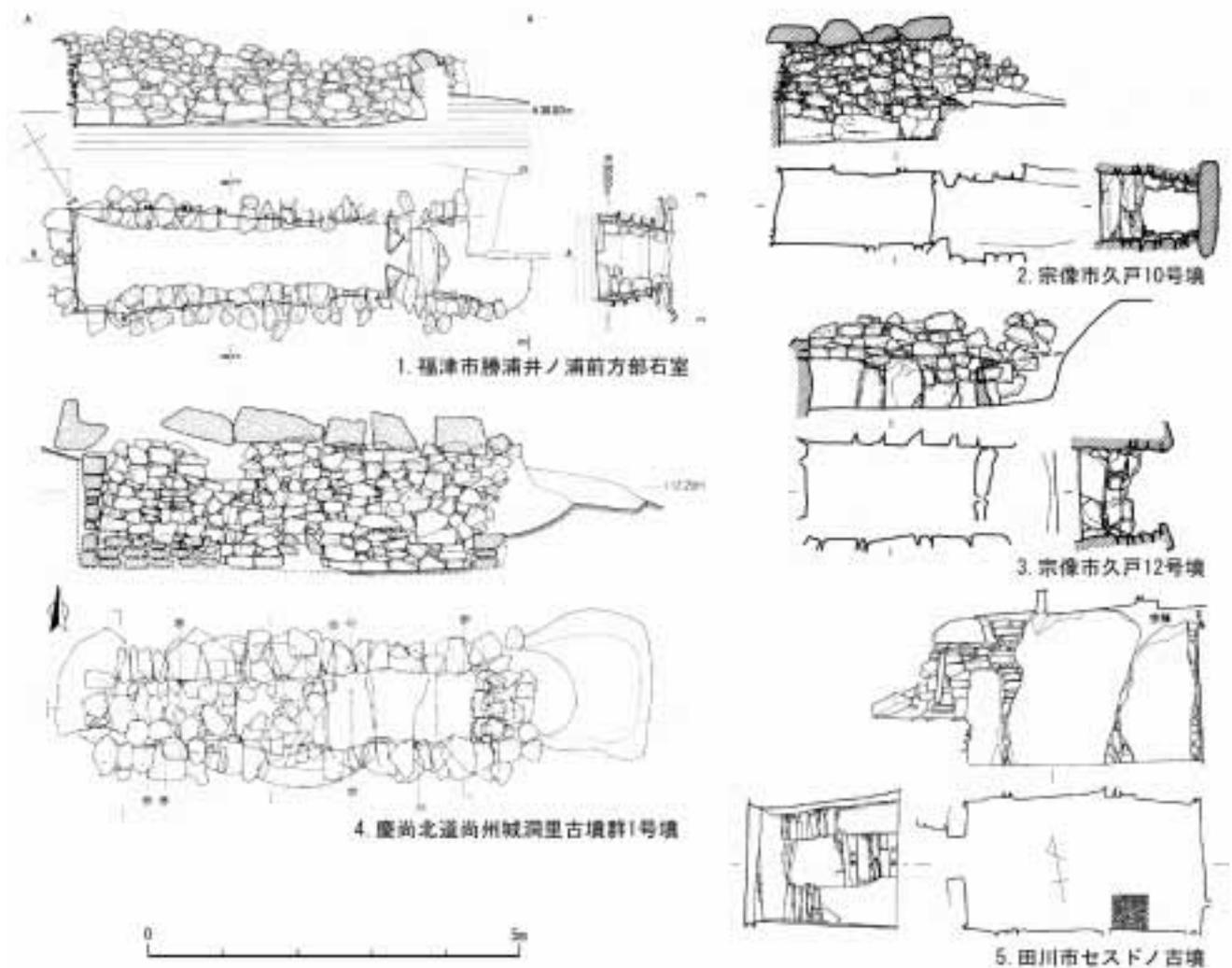
墳の規模にふさわしい。また、金銅製冠帽、金銅冠は百濟漢城期に並行する時期の馬韓の古墳出土資料と対比でき、被葬者の対外交渉、沖ノ島祭祀との関わりが垣間見える資料と言えよう。

#### b) 馬具

木心鉄板張輪鐙と杓子形木心鉄板張壺鐙の出土が注目される。木心鉄板張輪鐙は柄上端部片が2点出土していることから、1双分の副葬は間違いないが、小片となっており、全体を復元することは難しい状態であった。輪の縁板の破片の一部には表、裏の鉄板が当たらないと考えられるものがあり、輪下部は前後両面に鉄板が無く、木心が露出していた可能性が高いものである。

そのような特徴から類似すると考えられる韓国・慶尚南道陝川郡玉田古墳群70・82号墳と外形もほぼ合致する<sup>11)</sup>。全体としては高さ28cm、柄部高さ12cm、輪部の高さ16cm、輪部の幅18cm程となる。また、玉田70・82号墳出土品など玉田古墳群出土の木心鉄板張輪鐙では前面の鉄板中央が稜をなし、輪部の横断面が五角形になることが特徴とされている(諫早2006)。本例では明確な稜をなすものはないが、やや突出する横断面形の鉄板が前面、平坦な鉄板が後面と確定できる。福岡県内出土の類例には、前方後円墳編年6-7期の福岡県うきは市月岡古墳出土品(児玉編2005)、福岡県筑後市瑞王寺古墳出土品(諫早2006)が挙げられる。

杓子形木心鉄板張壺鐙は細片と化しており、破片を全部合わせても1双分に満たない。ただし、柄部と壺部の木目が平行に走ることから、柄部と壺部が一木作りの杓子形木心鉄板張壺鐙が副葬されていたことは間違いない。全高25cm、柄部高さ9cm、壺部高さ16cm、壺部幅17cmほどに復元される。鳩胸金具が上部で終わる点、鳩胸金具以外は鋌頭を見せない点は、隣接する勝浦井ノ浦古墳から出土した杓子形木心鉄板張壺鐙と大きく異なり、本例が先行すると考えられる。日本出土の壺鐙の中でも最古の一群に属するものとして注目されよう。ただし、鋌頭が見えない点など日韓出土の他の壺鐙と異なる特徴も多く、その時間的位置づけ、製作地の推定が難しい。鋌頭の見えない点などは木心鉄板張輪鐙に近く、その位置づけについては輪鐙も含



第18図 勝浦井ノ浦古墳前方部横穴式石室と関連資料（1/100、各報告書から転載）

めて検討する必要がある。

その他に鉄地金銅張の杏葉ないしは鏡板片と推測される破片、鉄製の杏葉または鏡板片、方形革金具、鉸具片などが出土している。

以上のように木心鉄板張輪鐙は玉田古墳群出土品との類似性が指摘できた。また、杓子形木心鉄板張壺鐙は鳩胸金具が上部で終わり、日本出土品としては最古式に属するものである。また、鉾頭が目立たないという特徴は日本出土品に例を見ないものである。このような点から、朝鮮半島出土の初期壺鐙との関連も深いと考えられる。したがって、馬具についても勝浦峯ノ畑古墳の被葬者と朝鮮半島との関係を示す資料として位置づけられよう。

## (2) 勝浦井ノ浦古墳の初期横穴式石室

勝浦井ノ浦古墳は全長70mの前方後円墳で、県道工事に伴い1976年に前方部横穴式石室が調査されている。石室内からは武器、甲冑小札、剣菱形杏葉・杓子形木心鉄板張壺鐙をはじめとする馬具など豊富な副葬品が出土している(川述編1977、橋口編1989)。

勝浦井ノ浦古墳で注目されることは無袖で、玄室長4.2m、玄室幅1.3mを測る前方部横穴式石室そのものである(第18図-1)。北部九州型初期横穴式石室A類は両袖のものがほとんどで、無袖のものはない。一方、北部九州型初期横穴式石室B類には無袖のものもあるが、そのほとんどが、第18図-2・3に示した宗像市久戸古墳群例(酒井編1979、図は重藤1992から)のように玄室長2.5m以下である。勝浦井ノ浦古墳前方部石室の玄室平面形は無袖の初期横穴式石室B類とするには、あまりにも長大であり、北部九州型初期横穴式石

室中に位置づけられない資料である。

このような平面形、築造企画の横穴式石室は朝鮮半島、加耶の「**縦穴系横口式石室**」のみであり、そこに直接的な起源があると考えるのが妥当であろう。第18図 - 4には慶尚北道尚州城道里1号墳の例を示した(韓国文化財保護財団1999)。長大な玄室平面形は勝浦井ノ浦古墳と同様であり、勝浦井ノ浦古墳前方部横穴式石室の特異な平面形は加耶の**縦穴系横口式石室**の導入ということから説明できる。

ところで、前方後円墳編年8期の田川市セスドノ古墳横穴式石室(第7図 - 14、第18図 - 5、佐田編1984)は天井にまで達する大石を側壁に立てる構築技法に特徴がある。また、セスドノ古墳に先行する7期の首長墓である田川市猫迫古墳(福本編2004)も同様の横穴式石室を主体部とする。このような構築技術は他の北部九州型初期横穴式石室にほとんど例が見られないが、森下浩行氏(森下1987)により、加耶の大邱市達西古墳群中の**縦穴系横口式石室**との類似性が指摘されている。

ただ、セスドノ古墳では柱状の石あるいは板石で突出した両袖を形成したり、楣石を設置するという加耶の**縦穴系横口式石室**には無く、北部九州型初期横穴式石室A類に由来する特徴を合わせ持っている。また、勝浦井ノ浦古墳前方部石室は基本的には無袖と表現してよいが、壁体の最下段には袖の部分に突出した石がある。すなわち平面プランの決定当初は両袖を意図したにもかかわらず、構築の途中で無袖に横口部を改変したと考えられる。突出した両袖という属性は加耶の**縦穴系横口式石室**には見られないので、やはり北部九州型初期横穴式石室に由来するものと判断される。

したがって、これらの石室は加耶から導入された技術と、福岡平野以西の北部九州地域で先行して成立していた北部九州型初期横穴式石室A類の築造技術とを組み合わせたものと解釈できる。このような点で、単純に渡来人が築造し、埋葬された横穴式石室とは言えない。伝統的な北部九州社会のネットワークとも結びついた首長層が渡来人と在地の横穴式石室構築技術者を編成して築造したと考えることが妥当であろう。

### (3) 小結

勝浦峯ノ畑古墳で確認された冠帽は百濟漢城期に忠

清南道水村里遺跡、忠清南道富長里遺跡、全羅南道新村里遺跡のような馬韓の首長層に配布されたものと同様のものと想定された。また、日本においては、熊本県江田船山古墳出土品との類似性が考えられる。このような冠帽の存在から、勝浦峯ノ畑古墳の被葬者は馬韓と太い交流経路を維持しつつ、さらには漢城期の百濟王権とも外交関係を樹立していた存在として想定される。その装身具の構成は、江田船山古墳との共通性が高いと考えられる。また、集落遺跡から推測される古墳時代中期後半以降の馬韓系渡来人の動向と符合すると言えよう。

ただ、勝浦峯ノ畑古墳出土の木心鉄板張輪鏝は慶尚南道玉田古墳群との類似性が指摘でき、大加耶地域との交渉のもとに入手した可能性が考えられる。また、勝浦井ノ浦古墳前方部横穴式石室は加耶の**縦穴系横口式石室**の築造企画を導入した可能性が考えられる。馬韓のみならず、加耶との関係を考慮する必要もある。在自小田遺跡において馬韓系土器とともに大加耶系陶質土器が出土したこととも関連していると考えられる。

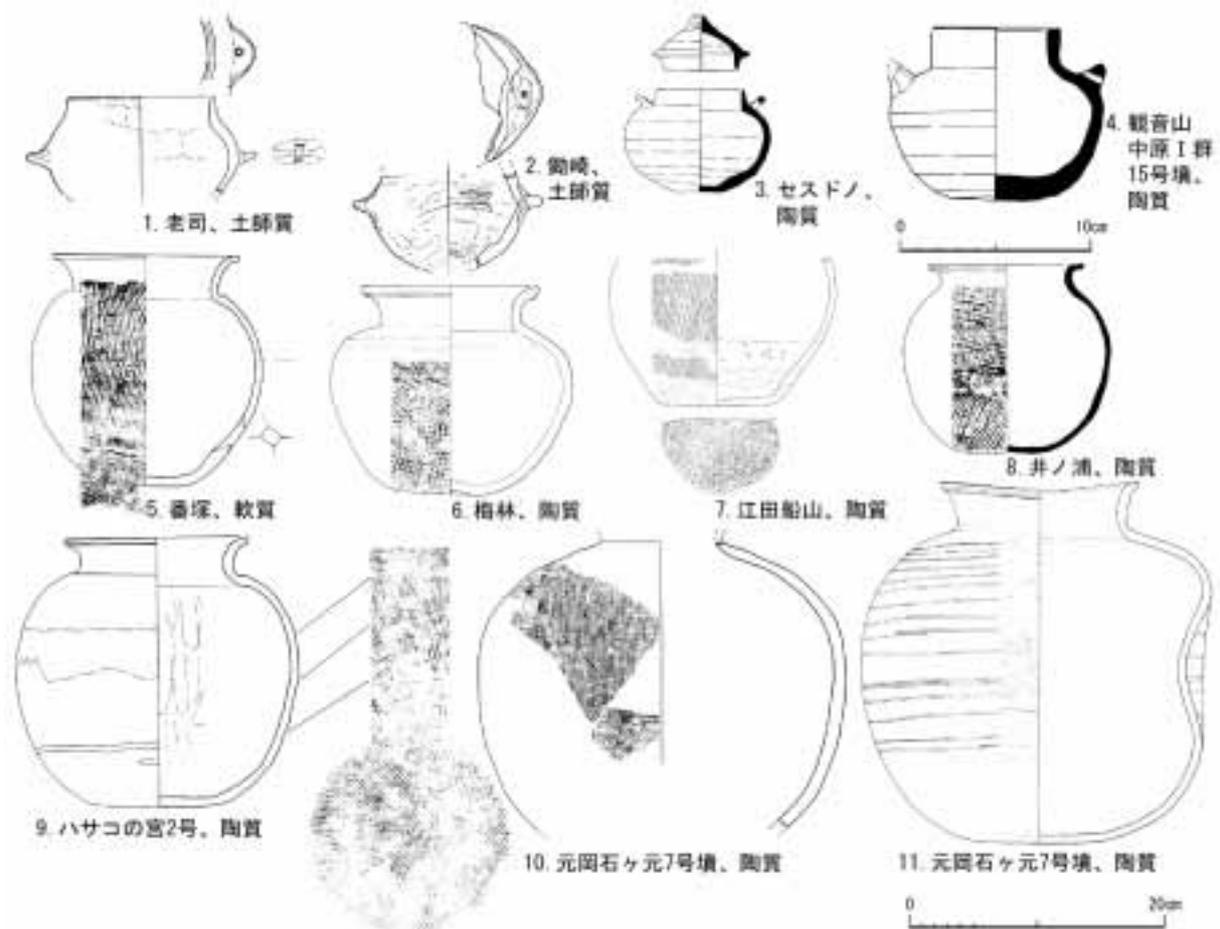
したがって、宗像地域では馬韓系渡来人の存在が目立つが、5世紀後半の津屋崎古墳群の背景にある首長層は馬韓のみならず大加耶をはじめとする加耶諸国とも政治的交渉を持っていたと考えられる。ただし、このような朝鮮半島との関係の背景には宗像地域の首長層の自律性のみならず、畿内政権の媒介や政治的な意図も想定される。宇野慎敏氏(宇野2010)は畿内政権が北部九州を軍事的に重要視したことを念頭に、津屋崎古墳群の形成や沖ノ島祭祀の展開を解釈している。このような問題について、次にやや視点を広げて北部九州の古墳時代首長層の対外交渉を捉えた上で、考えてみることにしたい。

## 6 . 古墳時代における宗像地域の対外交渉と沖ノ島

### (1) 北部九州地域の古墳における馬韓系土器

第3章では集落遺跡における北部九州と朝鮮半島、特に馬韓地域との関係を見てきたが、ここで古墳出土馬韓系土器から5～6世紀の北部九州の首長層が馬韓とどのように関係したかを考えてみることにしたい。

馬韓系の土器が豊富で、相当数の渡来人が居住した



第19図 北部九州の古墳出土馬韓系土器（1/6、各報告書より転載）

と考えられる西新町遺跡に対応する古墳時代前期の墓地、藤崎遺跡では、主体部内への土器の副葬などの渡来人の墓の特徴は看取できず、朝鮮半島系土器の出土数も極めて少ない。

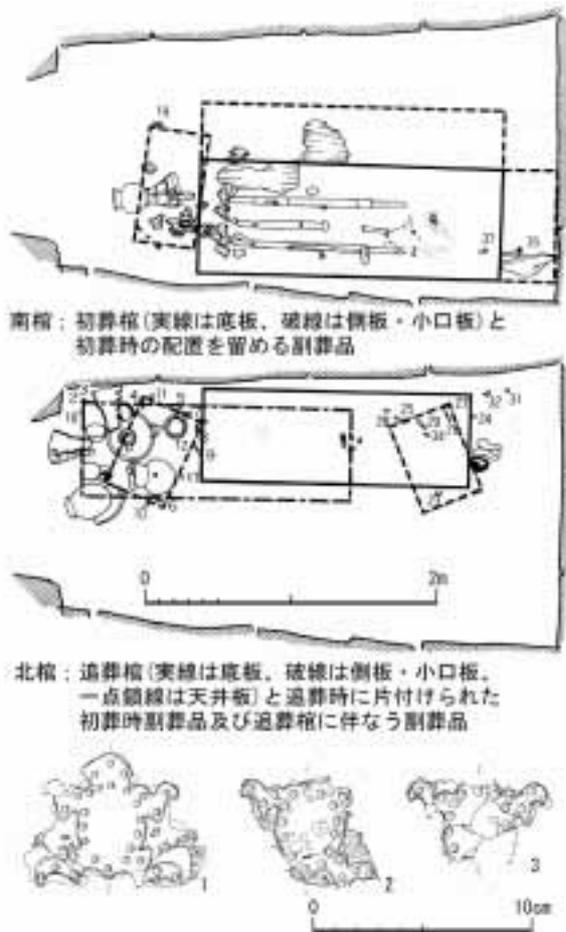
古墳時代中期初頭、前方後円墳編年4期になると北部九州の首長墓では初期横穴式石室が採用される。出現期の横穴式石室の代表例として、福岡市南区老司古墳、福岡市西区鋤崎古墳があるが、奇しくも両古墳から馬韓系両耳付壺を模倣した土師質小型両耳付壺が出土している(杉山編2002、第19図-1・2)。北部九州型初期横穴式石室は百済漢城期の横穴式石室を祖形にしたと考えられるが、その導入に際して馬韓の首長層、馬韓からの渡来人が介在したことを示唆しているのではなかろうか。

古墳時代中期末、8期の福岡市城南区梅林古墳(濱石他編1991、第7図-12)、福岡県苅田町番塚古墳(岡村他編1993、第7図-13)では鳥足文土器が出土して

いる(第19図-5・6)。また、馬韓系土器と考えられる陶質両耳付壺が先述したセストノ古墳から出土している(第19図-3)。これらの古墳はそれぞれの地域における首長墓級の古墳であり、その葬送儀礼に馬韓系の土器が使用されたと言える。一方、5世紀後半の全羅南道栄山江流域における横穴式石室の出現期には北部九州から導入された要素も指摘されている。その場合に対比される横穴式石室としてとりあげられるのが番塚古墳、梅林古墳等であるが、馬韓系土器の様相を加味すれば両地域の関係は双方向的であったと考えるべきであろう。

セストノ古墳の横穴式石室は上述したように加耶の竪穴系横口式石室の構築技術を導入したものであった。そこに副葬された馬韓系土器が舶載品であったとすれば、その被葬者は朝鮮半島の複数の地域との関係を結んでいたと言える。勝浦峯ノ畑古墳に漢城期百済製の冠帽、大加耶系の木心鉄板張輪鏝が同時に副葬されて

③ . 宗像地域における古墳時代首長の対外交渉と沖ノ島祭祀



第20図 番塚古墳の木棺配置と蟾蜍形飾金具  
(1/60、1/4、重藤2010cから転載)

いたことも同様に解釈できるであろう。

朝鮮半島と北部九州の首長層の間の具体的な関係を物語るのが番塚古墳と江田船山古墳である<sup>12)</sup>。番塚古墳では2時期の埋葬が推定され、初葬はTK47型式、追葬がMT15型式にあたる。初葬棺、追葬棺のいずれとも釘・鋸で結合し、蟾蜍(ヒキガエル)形飾金具を取り付けた木棺を使用していることも注目される(第20図)。釘・鋸で結合した木棺は同時期の北部九州になく、蟾蜍形飾金具も日本での出土例は皆無である。蟾蜍の図案は高句麗の装飾古墳や百済・武寧王陵出土の帯金具にみられ、棺にとりつけられたことから木棺そのものが朝鮮半島、恐らく百済からの舶載品と考えられる。百済熊津期の武寧王陵の木棺は日本産コウヤマキ製とされるが、番塚古墳ではその反対の関係が推測されるのである。

前方後円墳編年8期前半の築造と推測される江田船山古墳出土の陶質土器蓋杯は百済～全羅南道地域から



第21図 古墳時代前期の対外交渉ルート

の舶載品と推測されている(白井2001)。この他に、周溝出土の陶質土器平底壺(第19図-7、菊水町史編纂委員会編2007)は、鳥足文は見られず口縁部も残存しないが、番塚古墳・梅林古墳出土の鳥足文土器と同器形の馬韓系土器の可能性が高い。また、番塚古墳出土大刀、江田船山古墳出土象嵌銘大刀のいずれにも刀身に魚文が象嵌されており、魚文自体は武寧王陵出土銅金鏡と類似する。

番塚古墳出土大刀は伝統的な日本の木製刀装具を伴い、江田船山出土大刀は「治天下獲 鹵大王世」の銘文があるので、大刀そのものは日本製と考えられるが、百済と倭との間の交流が活発化した時期を象徴するものであろう。そして、両古墳における馬韓系土器の出土を勘案すると、番塚古墳、江田船山古墳の被葬者は、馬韓の人々とともに百済と倭の王権との対外交渉を媒介した人物であったと考えられる。

一方、この時期の馬韓の領域に相当する全羅南道では前方後方形古墳や九州系横穴式石室が出現し、その被葬者を倭人とする見解もある。しかし、近年では古墳時代前期以来の北部九州との繋がりを維持していた馬韓の人々が、百済の南方への進出に反応しながら、九州地域との交流を通じて自律的に受容したとする意



第22図 古墳時代中期前半の対外交渉ルート

見が有力となっている(金洛中2008、박영훈 2009)。

津屋崎古墳群中の古墳からは馬韓系土器そのものは出土していないが、勝浦峯ノ畑古墳の副葬品からは百済、馬韓との関係の深さがうかがえた。その対外交渉の実態も、番塚古墳、江田船山古墳と同様であったと想定される。また、馬韓の前方後円形古墳や九州系横穴式石室の出現と対をなすものとして考える必要もある。具体的には、古墳時代中期前半、さらにはそれ以前以来の馬韓及び加耶南部地域との交通のネットワークを基礎に、様々な面で朝鮮半島との対外交渉を媒介するような役割を果たしていたと想定される。畿内政権はそれを利用することにより朝鮮半島へと交通し、その結果として宗像地域の首長層の権威、沖ノ島祭祀の重要性が一層、高まったと考えている。

9期以降の北部九州地域の古墳における馬韓系土器は、首長墓級の大型古墳ではなく、群集墳中の古墳から出土する。9期前半の福岡県糸島市井ノ浦古墳(第7図-16、林1994)、9期後半の福岡県小郡市ハサコの宮2号墳(第7図-17、馬田他1979)ではいずれも鳥足文に近いタタキの陶質土器(第19図-8・9)が出土している。10期の福岡市西区石ヶ元古墳群(第7図-18)では、7号墳で鳥足文土器が、9号墳で馬韓系壺



第23図 古墳時代中期後半の対外交渉ルート

が出土する(第19図-10・11、松浦編2003)。また、10期末、すなわち6世紀末の福岡県筑紫郡那珂川町観音山古墳群中原I群15号墳(第7図-19)では陶質両耳付壺が出土している(第19図-4、佐藤他編1988)。

このような変化の背景には、渡来人が定着し、中小規模の古墳を構築するようになった可能性、朝鮮半島との交渉を物語る遺物が、首長墓級の古墳レベルでは装身具、武器、馬具等の威信財に転換した可能性が考えられる。このような問題をここで議論する準備はないが、今後、宗像地域との関連で検討する必要があるだろう。

## (2) 朝鮮半島との対外交渉と宗像地域の首長層

集落遺跡における出土遺物等から、宗像地域では中期後半以降、馬韓からの渡来人の存在が確認できた。勝浦峯ノ畑古墳出土遺物や勝浦井ノ浦古墳前方部横穴式石室からは百済、馬韓とともに大加耶等の加耶との関係が想定された。一方、古墳時代前期の北部九州地域では西新町遺跡を中心とした博多湾沿岸地域の集団が、馬韓や加耶との交易を担っていたと考えられた。また、古墳時代中期前半には初期横穴式石室の出現から、北部九州西部と百済あるいは馬韓との交通関係が

確立していたと考えられる。このような時期ごとの北部九州の各地と朝鮮半島との関係について、図式的に示したものが第21～23図である。

第21図に示したように古墳時代前期には西新町遺跡を中心とする博多湾沿岸地域が朝鮮半島との交易の主体をなしていたと考えられる。これを「博多湾交易」という名称で説明する考えもある(久住2007)。実際、この時期は、対馬・吉岐、唐津平野、糸島半島、福岡平野を除けば朝鮮半島系の土器の出土も少ない段階である。その中でも西新町遺跡の存在が際立ち、朝鮮半島との交易において中核的な役割を果たしたと考えられる。また、この時期には第3図にみたように、筑前北部地域の中でも糸島半島から福岡平野にかけての地域で、大型の首長墓級古墳が築造され、首長層の権威が対外交渉と結びつきながら成長したことを推測させる。

ところで、西新町遺跡では朝鮮半島から舶載された土器、渡来人が居住したと考えられるカマド付竪穴住居とともに、畿内、山陰、瀬戸内海沿岸などの各地域の土器が出土する。また、西新町遺跡の墓地と考えられる藤崎遺跡では素環頭大刀、舶載三角縁二神二車馬鏡、舶載三角縁盤龍鏡などの注目すべき副葬品も出土しているが、総じて中小規模の方墳群から構成されており、早良平野を統括したような首長墓と位置づけるには無理がある。したがって、西新町遺跡における交易はレンフルーとバーンによる交易形態の分類(Renfrew & Bahn 2000)の港湾交易(port of trade)のような性格であったと考えられよう。

続く、古墳時代中期前半の状況を示したものが第22図である。この時期になると西新町遺跡の集落は断絶するが、糸島市三雲・井原遺跡群で馬韓系、加耶系土器が出土するなど、巨視的に見れば前代からの交易関係が維持されていたと考えられる。ただ、中期前半には有明海沿岸地域にもいち早く横穴式石室が導入されている。朝鮮半島、特に百済、馬韓と有明海沿岸の首長層の交流が活発化したのもこの時期からと考えられよう。

これに対して、宗像地域ではこの時期の渡来人の様相を物語る資料も少なく、初期横穴式石室も分布していない。したがって、当該期の宗像地域の対外交渉は、糸島半島から福岡平野、有明海沿岸地域とは差があっ

たと考えられる。ただ、この時期にはすでに沖ノ島祭祀が本格化し、朝鮮半島への交通路のひとつとして宗像地域の重要性が高まっていたことは疑いない。宮司井手ノ上古墳、奴山正園古墳の加耶系陶質土器を考慮すれば、この時期には宗像地域と加耶との交通路が成立し、それは前代からの博多湾以西の地域を中心とした交通路とはやや異なる性格を持っていたのではないかと想定される。このような点を検証するには宗像地域における集落遺跡の解明と、中小規模の古墳群の分析が必要である。また、東郷高塚古墳等の釣川流域の首長墓はもちろん、遠賀川河口の首長墓の動向も問題となろう。

第23図には古墳時代中期後半における朝鮮半島と北部九州との関係を示した。糸島半島から福岡平野にかけての地域、有明海沿岸地域は、馬韓系土器の分布等から百済および馬韓との関係を維持していたと考えられる。また、北部九州各地で大加耶系馬具をはじめとする加耶と関連する考古資料も少なくない。

一方、この時期になると、宗像地域で馬韓系の渡来人の存在が想定され、宗像地域と百済、馬韓との関係が確立したことが大きな画期となる。また、宗像地域でも大加耶系の土器及び馬具や加耶系「竪穴系横口式石室」が存在し、宗像地域は朝鮮半島の複数の地域と対外交渉を結ぶようになったと考えられる。7期以降、可耕地の少ない地域に津屋崎古墳群という複数系列の首長墓が展開するのも、このような対外交渉上の理由から、海に面した場所に宗像地域さらにはその周辺の首長層が造墓地を選択するようになったためではないかと推測している。

なお、宗像地域には渡来人が定着することによって、朝鮮半島との交易拠点になったと考えられる。その場合、在自小田遺跡の祭祀的建物に伴う馬韓系土器、新原奴山1号墳における鍛冶工具から、渡来人の編成あるいは交易そのものを首長層が統制したと考えられる。このような様相は古墳時代前期の西新町遺跡における交易とは異なり、レンフルーとバーンによる交易形態の分類(Renfrew & Bahn 2000)に照らすと、中心地における再分配(central place redistribution)として理解することができる。

大型古墳の動向からは、この時期以降、宗像地域あ

るいは遠賀川中流域が筑前北部において最大規模の古墳を築造するようになる。中期前半以前の大型古墳の築造動向と対外交渉が一致するように、中期後半以降におけるこのような大型古墳の築造動向も、宗像地域と朝鮮半島との対外交渉の拡大、活発化と連動していると考えられる。遠賀川中流域における山の神古墳や王塚古墳などの大型前方後円墳の築造やセスドノ古墳や番塚古墳における馬韓系土器の出土や加耶からの横穴式石室構築技術の導入も、このような宗像地域を軸とした対外交渉の変化を契機にしたと考えられよう。

## 7. おわりに

本稿では、宗像地域の首長墓級の大型古墳の編年的検討を行い、筑前北部の他地域と対比した。それにより、古墳時代中期後半以降、宗像地域は一貫して、筑前北部地域全体においても最大級の古墳を連続して築造していることが確認された。これは沖ノ島祭祀の盛行とも合致すると言える。また、宗像地域の古墳の頂点にたつ津屋崎古墳群の構成は、福岡県八女市を中心とする八女古墳群をも凌駕しており、北部九州さらには西日本を代表する大規模で複雑な古墳群を形成していると理解できる。

このような古墳群の動向は馬韓をはじめとする朝鮮半島各地からの渡来人の動向とも合致している。津屋崎古墳群さらには宗像地域が古墳時代中期後半以降の朝鮮半島との対外交渉において極めて重要な役割を担ったと理解できる。沖ノ島祭祀遺跡は、古代の祭祀遺跡として国内最大規模であることでも重要であるが、その成立を考えるためには海上交通、対外交渉からの位置づけも不可欠と考えられる。津屋崎古墳群など宗像地域の首長層が朝鮮半島との対外交渉に深く関与していたことは、沖ノ島祭祀を実際に主導したのが宗像地域の首長層であることを端的に物語るとともに、それらの首長墓級の大型古墳の展開が祭祀遺跡の形成過程や国家的な意義の高まりと密接に結びついていると認識できる。

ただ、津屋崎古墳群の本格的な形成は沖ノ島祭祀が本格化する時期からしばらく遅れることも事実である。古墳時代前期末頃の釣川流域の東郷高塚古墳、田久貴

船前1・2号墳や遠賀川河口部の大型古墳の被葬者がどのように沖ノ島祭祀遺跡に関わったかという問題についての調査研究の深まりが今後の課題としてあげられる。また、中期前半以前の朝鮮半島から宗像地域への人の移動、あるいは物資の流通などの解明もあわせて行う必要がある。

本稿を作成するにあたり、下記の方々に御教示をいただきました。記して感謝いたします。(五十音順、敬称略)

大庭孝夫 岸本圭 金武重 久住猛雄  
 権五榮 白木英敏 武末純一 西谷正  
 辻田淳一郎 橋口達也 桃崎祐輔 吉村靖徳

補注

- 1) 筆者も筑前地域の首長墓を論ずる際に宗像地域の首長墓に言及したことがある(重藤1998、重藤2008)。以下の宗像地域の首長墓に関する記述は花田勝広氏、池ノ上宏氏の研究を参考に、前稿を改変したものである。
- 2) 久住猛雄氏らは分布調査資料も加味して 5 を 2 系列に分けて考え、福岡平野西部、福岡市中央区周辺には図 2 ~ 5 には掲載していない首長墓系列が存在する可能性を指摘している(久住・宮元2010)。また、3 も 2 系列に分かれる可能性がある。これらの古墳の内容解明の進展に応じて図の修正を図ることにしたい。なお、紙幅の関係から本節で論及する宗像地域以外の筑前北部の各古墳の文献を省略している。久住氏らの論考及び筆者の前稿(重藤2008)を御参照いただきたい。
- 3) 以下の八女古墳群の記述は、筑後地域の首長墓系列を検討した前稿(重藤2010c)を基礎としている。第 5・6 図では 1 ~ 9 を省略したが、筑前南部とうきは市域の首長墓系列に相当する。以下、本節で言及する古墳の文献とともに、詳細はそちらを御参照いただきたい。
- 4) 本節は筆者が吉田東明氏、吉村靖徳氏と連名で執筆した西新町遺跡発掘調査報告書(下原編2009)の記載を基礎としている。西新町遺跡の参考文献については省略したが、詳細は同書を御参照いただきたい。
- 5) 本節の内容は、2010年11月に公州国立博物館で開催された中央文化財研究院創立10周年記念国際学術大会『馬韓・百済人の日本列島移住と交流(原題は韓国文)』における筆者の発表の一部を基礎としている。また、同様のことを別稿(重藤1998)でも簡単に触れたことがある。
- 6) 森下1987、重藤1992、重藤1999による。なお、宗像~津屋崎の地域に多く見られる玄室幅1.5m、現室長2.5m以下の小形の横穴式石室を「竪穴系横口式石室」と呼ぶことも多い。ただ、これらは北部九州型初期横穴式石室A類の影響により、木棺を使用しない北部九州に独特の小形の竪穴式石室である「石棺系竪穴式石室」の技術をもとに築造された横穴式石室である。韓半島南部の「竪穴系横口式石室」との関連性は薄いと考えられるので、ここでは、誤解、混乱を防ぐために北部九州型初期横穴式石室B類の用語を用いている。
- 7) 第11図及び第2表に関する記述は筆者の前稿(重藤1999)を基礎としている。なお、図と表には北部九州型初期横穴式石室と肥後型横穴式石室の要素を合わせた筑肥型横穴式石室(柳沢1993)を含んでいる。一方、この時期の九州内の横穴式石室としては、他に熊本県を中心に分布する方形プランで玄室床面に石障を設置した「肥後型横穴式石室」があるが、それらは除外している。
- 8) 宗像地域の朝鮮半島系土器に関する記載は筆者と杉本岳文氏、神保君久氏との連名で発表した前稿(重藤他2005)の筆者担当部分でも述べたことがある。同様の

ことを前掲注5発表でも論じたことがある。

- 9) 渡来人の墓地は今後見つかる可能性とともに、一箇所にまとまっている可能性、あるいは韓半島での葬送儀礼をそのまま行わずに、他の古墳と同様の葬送儀礼で葬られた可能性も想定される。本稿では十分に論じる準備はないが、玄界灘に浮かぶ相島島内の新宮町相島積石塚群もそのような観点から検討する必要がある。
- 10) 勝浦峯ノ畑古墳の後円部横穴式石室の副葬品は2010年度末に福津市教育委員会より報告書が刊行された。本節は筆者も整理に関わった装身具、馬具の一部についての所見を述べることにしたい。図、写真等は掲載していないが、詳細は報告書を御参照いただきたい。
- 11) 類例の検索に際しては柳昌煥1994を参照した。
- 12) 番塚古墳については別稿(重藤2010b)での論を基礎としている。

参考文献  
(日本語)

- 池ノ上宏編(2002a):『奴山伏原遺跡』津屋崎町文化財調査報告書 第18集
- 池ノ上宏編(2002b):『津屋崎町内遺跡』津屋崎町文化財調査報告書 第19集
- 池ノ上宏編(2004):『津屋崎古墳群』I 津屋崎町文化財調査報告書 第20集
- 池ノ上宏・花田勝広(2000):「筑紫宮地嶽古墳の再検討」;  
『考古学雑誌』85巻1号
- 池ノ上宏・安武千里編(1994):『在自遺跡群』I 津屋崎町文化財調査報告書 第9集
- 池ノ上宏・安武千里編(1995):『在自遺跡群』II 津屋崎町文化財調査報告書 第10集
- 池ノ上宏・安武千里編(1996a):『須多田古墳群』津屋崎町文化財調査報告書 第12集
- 池ノ上宏・安武千里編(1996b):『在自遺跡群』III 津屋崎町文化財調査報告書 第11集
- 池ノ上宏・安武千里(1998):『生家釘ヶ裏遺跡』津屋崎町文化財調査報告書 第14集
- 諫早直人(2006):「筑後市瑞王寺古墳出土馬具の再検討」;  
『筑後市内遺跡群』IX 筑後市文化財調査報告書 第73集
- 宇野慎敏(2010):「沖ノ島と北部九州における首長層の動向」;  
『古文化談叢』第63集
- 大坪剛・下川航也・武田光正・濱田学・平野隆之(2008):  
『高丸・友田遺跡群』岡垣町文化財調査報告書 第27集
- 岡田裕之(2003):「北部九州における須恵器生産の動向 -  
牛頸窯跡群の検討を中心として -」;  
『古文化談叢』第49集
- 岡崇(1999):『田久瓜ヶ坂』宗像市文化財調査報告書 第46集
- 岡崇・坂本雄介(2007):『田野瀬戸古墳』宗像市文化財調査報告書 第59集
- 岡部裕俊(1987):『井原遺跡群』前原町文化財調査報告書 第25集

- 岡村秀典・重藤輝行編(1993):『番塚古墳』苅田町文化財調査報告書 第20集 苅田町教育委員会・九州大学文学部考古学研究室
- 小田富士雄(1970):「磐井の反乱」;鏡山猛・田村圓澄編『古代の日本』3 九州 角川書店
- 蒲原宏行(1995):「古墳と豪族 - 佐賀平野の首長墓」;小田富士雄編『風土記の考古学』5 『肥前国風土記』の巻 同成社
- 川述昭人編(1977):『新原・奴山古墳群』福岡県文化財調査報告書 第54集
- 菊水町史編纂委員会編(2007):『菊水町史 江田船山古墳編』和水町
- 金鍾萬(訳;比嘉えりか)(2010):「鳥足文土器の起源と展開様相」;『古文化談叢』第63集
- 熊代昌之編(2002):『徳重本村』宗像市文化財調査報告書 第52集
- 久住猛雄(2007):「博多湾貿易」の成立と解体 - 古墳時代初頭前後の対外交易機構 - ;『考古学研究』第53巻 第4号
- 久住猛雄・宮元香織(2010):「筑前地方における首長墓系列の再検討」;『九州における首長墓系譜の再検討』第13回九州前方後円墳研究会発表資料集
- 小池史哲編(1983):『三雲遺跡』Ⅳ 福岡県文化財調査報告書 第65集
- 児玉真一編(2005):『若宮古墳群』Ⅲ 吉井町文化財調査報告書 第19集
- 小林義彦編(1989):『唐原遺跡』Ⅱ 福岡市埋蔵文化財調査報告書 第207集
- 近藤義郎編(1992):『前方後円墳集成』九州編 山川出版社
- 近藤義郎編(2000):『前方後円墳集成』補遺編 山川出版社
- 佐々木隆彦(1978):『奴山5号墳』津屋崎町文化財調査報告書 第2集
- 酒井仁夫(1979):『相原古墳群』宗像町文化財調査報告書 第1集
- 酒井仁夫編(1979):『久戸古墳群』宗像町文化財調査報告書 第2集
- 佐田茂(1981):「筑後地方における古墳の動向」;『鏡山猛先生古稀記念 古文化論攷』鏡山猛先生古稀記念論文集刊行会
- 佐田茂編(1984):『セストノ古墳』田川市文化財調査報告書 第3集
- 佐田茂(1991):『沖ノ島祭祀遺跡』考古学ライブラリー63 ニュー・サイエンス社
- 佐藤昭則・茂和敏編(1988):『観音山古墳群』Ⅲ 那珂川町文化財調査報告書 第17集
- 重藤輝行(1992):「北部九州の初期横穴式石室にみられる階層性とその背景」;『九州考古学』第67号
- 重藤輝行(1998):「北部九州における古墳時代中期の首長と社会」;『中期古墳の展開と変革 - 5世紀における政治的・社会的変化の具体相(1) - 』第44回埋蔵文化財研究会発表資料集
- 重藤輝行(1999):「北部九州における横穴式石室の展開」;『九州における横穴式石室の導入と展開』第2回九州前方後円墳研究会発表資料集
- 重藤輝行・杉本岳史・神保公久(2005):「筑前・筑後の渡来系の遺構・遺物」;『九州における渡来人の受容と展開』第8回九州前方後円墳研究会発表資料集
- 重藤輝行(2008):「玄界灘沿岸地域の後期古墳」;『後期古墳の再検討』第11回九州前方後円墳研究会発表資料集
- 重藤輝行(2009):「古墳時代中期・後期の筑前・筑後地域の土師器」;『地域の考古学 佐田茂先生佐賀大学退任記念論文集』佐田茂先生論文集刊行会
- 重藤輝行(2010a):「北部九州における古墳時代中期の土師器編年」;『古文化談叢』第63集
- 重藤輝行(2010b):「古墳時代の北部九州における土器副葬儀礼の出現」;『古文化談叢』第65集(1)
- 重藤輝行(2010c):「筑後・肥前の首長墓系譜」;『九州における首長墓系譜の再検討』第13回九州前方後円墳研究会発表資料集
- 清水比呂之編(1988):『久原遺跡』宗像市文化財調査報告書 第19集
- 下原幸裕編(2009):『西新町遺跡』Ⅸ 福岡県文化財調査報告書 第221集
- 白井克也(2001):「百済土器・馬韓土器と倭」;『枚方歴史フォーラム 検証 古代の河内と百済』枚方歴史フォーラム実行委員会
- 白木英敏(1994):『富地原川原田』Ⅰ 宗像市文化財調査報告書第39集
- 白木英敏(1995):『富地原森』宗像市文化財調査報告書 第40集
- 白木英敏編(2007):『桜京古墳』宗像市文化財調査報告書 第58集
- 城ヶ谷古墳調査団(1974):『城ヶ谷古墳群』クボタハウス株式会社・住友不動産株式会社
- 杉山富雄編(2002):『鋤崎古墳』福岡市埋蔵文化財調査報告書 第730集
- 武末純一(2010):「集落からみた渡来人」;『古文化談叢』第63集
- 武田光正(1991):『尾崎・天神遺跡』Ⅰ 遠賀町文化財調査報告書 第2集
- 田辺昭三(1981):『須恵器大成』 角川書店
- 中川潤次編(1989):『友田遺跡群2区』岡垣町文化財調査報告書 第10集
- 中川潤次編(1990):『瀬戸遺跡』岡垣町文化財調査報告書 第11集
- 中島直幸編(1987):『双水柴山遺跡』唐津市文化財調査報告書 第20集
- 西田大輔(1994):『夜臼・三代地区遺跡群』第4分冊 新宮町文化財調査報告書
- 橋口達也(1983):「北部九州における陶質土器と初期須恵器」;橋口達也編『古寺墳墓群』Ⅱ 甘木市文化財調査報告書 第15集
- 橋口達也編(1989):『新原・奴山古墳群』津屋崎町文化財調査報告書 第6集

橋口達也編(1991):『宮司井手ノ上古墳』津屋崎町文化財調査報告書 第7集  
 波多野皖三・春成秀爾(1967):『東郷遺跡群』日本住宅公社  
 花田勝広(1999):「沖ノ島祭祀と在地首長の動向」;『古代学研究』第146号  
 花田勝広(2002):「筑紫宗像の生産工房」;田辺昭三先生古稀記念の会編『田辺昭三先生古稀記念論文集』真陽社  
 濱石哲也・菅波正人・林田憲三編(1991):『梅林古墳』福岡市埋蔵文化財調査報告書 第240集  
 原俊一(1989):『東郷高塚古墳』I 宗像市文化財調査報告書 第21集  
 林寛(1992):『井原塚廻遺跡』前原町文化財調査報告書第38集  
 林寛(1994):『井ノ浦古墳・辻ノ田古墳群』前原市文化財調査報告書 第53集  
 福本寛編(2004):『猫迫1号墳』田川市文化財調査報告書 第11集  
 馬田弘稔・森田勉(1979):『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』 下巻  
 松浦一之助編(2003):『元岡・桑原遺跡群』2 福岡市埋蔵文化財調査報告書 第744集  
 牟田華代子・岡部裕俊編(2002):『三雲・井原遺跡』II 前原市文化財調査報告書 第78集  
 本村豪章(1990):「古墳時代の基礎研究稿-資料篇(II)」;『東京国立博物館紀要』第26号  
 桃崎祐輔(2008):「江田船山古墳遺物群の年代をめぐる予察」;菅谷文則編『王権と武器と信仰』同成社  
 森貞次郎(1956):「筑後国土記逸文に見える筑紫君磐井の墳墓」;『考古学雑誌』第41巻 第3号  
 森下浩行(1987):「九州型初期横穴式石室考-畿内型出現以前横穴式石室の様相」;『古代学研究』第115号  
 毛利光俊彦(1995):「日本古代の冠-古墳出土冠の系譜」;『文化財論叢』II 奈良文化財研究所創立40周年記念論文集 同朋舎出版  
 李敷 訳;山本孝文 訳(2007):「公州水村里古墳群に見る百濟墓制の変遷と展開」;『古文化談叢』第56集  
 柳沢一男(1987):「石製表飾考」;『岡崎敬先生退官記念論集 東アジアの考古と歴史』下巻 同朋舎  
 柳沢一男(1991):「九州古墳文化の展開」;下條信行・平野博之・知念勇・高良倉吉『新版 古代の日本』第3巻 九州・沖縄 角川書店  
 柳沢一男(1993):「横穴式石室の導入と系譜」;『季刊考古学』第45号  
 山崎龍雄編(1993):『有田・小田部』第18集 福岡市埋蔵文化財調査報告書 第340集  
 吉田晶(1975):「古代国家の形成」;『岩波講座 日本歴史』2 岩波書店  
 吉留秀敏・渡辺芳郎編(1989):『老司古墳』福岡市埋蔵文化財調査報告書 第209集

韓国語)

慶南發展研究院歴史文化센터(2007):『咸陽花山里遺蹟』  
 國立文化財研究所(2001):『風納土城』  
 國立全州博物館(1994):『扶安竹幕洞祭祀遺蹟』  
 金羅英(2007):「嶺南地域 三韓時代 住居址의 變遷과 地域性」;『嶺南考古學』43  
 金洛中(2008):「榮山江流域 初期横穴式石室의 登場과 意味」;『湖南考古學』第29輯  
 木浦大學校博物館(1989):『郡谷里貝塚』III  
 木浦大學校博物館(2003):『咸平中良遺蹟』  
 박영훈(2009):「전방후원형 고분의 등장배경과 소멸」;『湖南考古學報』第32輯  
 釜山大學校博物館(1993):『金海禮安里古墳群』II  
 釜山女子大學校博物館(1984):『昌原三東洞甕棺墓』  
 徐賢珠(2006):『榮山江流域古墳土器研究』學研文化社  
 徐賢珠(2008):「영산유역권 3~5 세기 고분출토유물의 변천 양상」;『湖南考古學報』28輯  
 順天大學校博物館(2002):『麗水永長洞遺蹟』II  
 우리文化財研究院(2008):『昌寧桂城里遺蹟』  
 柳昌煥(1994):「伽耶古墳 出土 鏡子에 대한 연구-木心鐵板被輪鏡을 중심으로-」東義大學校大學院碩士學位論文  
 李漢祥(2008):「5~6 世紀 韓半島와 日本列島の交流樣相-금속장신구의 제작기법을 중심으로-」;『考古學探求』第3号  
 昌原大學博物館(1990):『馬山縣洞遺蹟』  
 全南大學校博物館(2003):『咸平昭明洞遺蹟』  
 全南大學校博物館(2004):『咸平禮德里萬家村古墳群』  
 全北文化財研究院(2007):『高敞南山里遺蹟』墳墓編  
 全北文化財研究院(2008):『全州中仁洞遺蹟』  
 忠清南道歴史文化研究院(2008a):『鷄龍立岩里遺蹟』  
 忠清南道歴史文化研究院(2008b):『瑞山富長里遺蹟』  
 韓國文化財保護財団(1999):『尚州城洞里古墳群發掘調査報告書』  
 湖南文化財研究院(2004):『高敞萬洞遺蹟』  
 湖南文化財研究院(2005):『海南新今遺蹟』  
 湖南文化財研究院(2007a):『益山射德遺蹟』I・II  
 湖南文化財研究院(2007b):『咸平礮岩遺蹟』  
 湖南文化財研究院(2007c):『潭陽梧山遺蹟』  
 湖南文化財研究院(2008a):『淳昌内月遺蹟』  
 湖南文化財研究院(2008b):『光州河南洞遺蹟』III

英語)

Colin Renfrew & Paul Bahn (2000): Archaeology Theories Methods and Practice; Third edition Thames & Hudson

## 「宗像・沖ノ島と関連遺産群」研究報告Ⅰ

---

平成 23 年 3 月 31 日

発 行 「宗像・沖ノ島と関連遺産群」世界遺産推進会議  
(福岡県・宗像市・福津市)

福岡県企画・地域振興部総合政策課世界遺産登録推進室  
〒812-8577  
福岡県福岡市博多区東公園 7 番 7 号

印 刷 株式会社プレック研究所  
〒102-0083  
東京都千代田区麴町 3 丁目 7 番地 6